
ココロの花

スクロール

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「口の花

【著者名】

ZZード

ZZ698M

【作者名】

スクリール

【あらすじ】

自分の表情と気持ちを表に出すことが苦手な女の子と、優しい男の子のお話。

『冷血王女』の続きのお話となつておりますが、こちらだけでも楽しめるようになっておりますが、『冷血王女』の方も読んでいただけたら、入り込みやすいと思います。前作に比べ、甘甘成分増量中です。

セミが騒がしく泣き喚き、草木も緑色を深くして生い茂つていてすっかりと夏の色を見せていた。春にはいなかつた野球部員たちがグランドで汗を流しているし、吹奏楽部の練習の音が校舎中に鳴り響いてる。そしてボクは今風紀委員会の会議に出席していた。全開で開けられた窓からは、外の騒音がそのまま教室内に侵入し、暴れまわってる。まあ、会議といつても『挨拶運動』の当番や『身だしなみチェックの注意点』などいつもどおりの内容で特に聞く必要もないんだけれど。そして、今はそんな会議なんて耳に入つてこないで、ずっとボクは悩んでいたんだ。

そう、優しくてお人よしで、ボクの心をいつのまにか盗んでいつてしまつていた、あの人のことを…

口口口の花

高校1年生の3学期の終業式の日、ボクはクラスメートの渡瀬に呼び出された。そして、予想通りに告白された。ただ、今までと違つたのは本当にボクのことをずっと見つけてくれたこと。ボクの悩みに気づいてくれたこと、本当に好きだつてひしひしと伝わつてくれるくらいに自分の感情を表してくれた彼。もっと渡瀬のことが知りたくなつた。

初めは、ただ的好奇心。どうしてそんなに自分の気持ちに素直になれるのかが不思議で仕方なかつた。ボクといえば、自分の気持ちなんて表に出さないようはずつと過ごしてきた。といつよりも、自分の気持ちを表に出すことが怖かつたんだ。それは、小学校のときのトラウマが原因なんだけれど。そのせいで、中学校に友達といえりょうな友達は出来なかつた。高校は、高校こそはと気合を入れてみたものの、染み付いてしまつた自分の性格をいきなり変えるなん

て土台無理な話だ。

そんな、ボクの小さな悩みに気が付いてくれたのは渡瀬。こんなボクを、みんなの輪の中に連れて行こうとがんばってくれた。それは、ボクが望んだから。ボクの望みをかなえようとがんばる彼に恋をした。なにかきっかけがあつたわけじゃない。ただ、一緒にいてくれるだけで楽しかった。無表情が標準で張り付いてしまっている僕の顔には楽しいなんて表情をしていなかつたかもしれないけれど、渡瀬と居る時間はボクにとつてかけがえのないモノになっていたんだ。春休みは渡瀬とよく会つては表情を表に出す練習、人と話をする練習をした。たぶん、その時くらいからかな？渡瀬と居ることが楽しいと感じ始めたのは、ぶっきらぼうなボクの言葉遣いにも嫌な顔をせずにずっと付き合つてくれた。ボクを笑わせようとがんばる彼。ボクが感情を表に出せるようにずっとずっと手伝つてくれた彼。気がついたら、ボクの頭の中は渡瀬のことでいっぱいになつていた。

春休みが終わり、2年生になつて同じクラスになれたこと。こんな些細なことがこんなにもうれしく感じるものなんだと実感したしこんなにも少女漫画の登場人物みたいになつてはいる自分に驚いた。学校生活はとつと、渡瀬との訓練の成果で、最近やつと友達も出来て高校生活が楽しくなつてきていた。まあ、一つ難点があるとしたら、友達と話すことが増えて渡瀬としゃべるのがすこし減つてしまつたことかな。

ボクの、無表情と口が悪いつていうのは、渡瀬が言つには「ずいぶん表情が柔らかくなつたしすごく良い方向に進んでるよ」らしい。これも、渡瀬のお陰だ。ボク一人でやつていても、光波ならなかつたと思う。また、中学校のときのように一人で学校生活を送つていたかもしれない。そう思うと、渡瀬には感謝しても仕切れないくらい感謝してる。まあ、それはおいといて。

今、ボクはすごく悩んでることがある。それは、渡瀬としゃべる回数が減つてきたとか、そんなんではなくて、渡瀬がずっと三浦っていう女子にあまりつきりつてことだ。例えば、一緒に帰ろうとした

てもずっと三浦が居て一緒に帰れなかったり、休み時間にちょっと話したいことがあって話しに行こうとしても三浦が居たり。邪魔とは言わないけれども、渡瀬にベタベタしててちょっと離れてほしいと思ってしまう。そして、春休みから先月くらいまで、春休みのときに会っていたように、学校が休みの土曜日か日曜日に会つていたんだけれど、それがぱたりと無くなつてしまつた。それも、ちょうど三浦が渡瀬にへばりつき始めたときくらいから。渡瀬は優しいから、ボクの時のように三浦のために何かしてあげてるのかもしれない。けれど、今はそれがたまらなく嫌だつた。自分でも嫌な女だと思うけど、それでもこの嫉妬心という奴は厄介で、なかなかどこかに行つてくれないどころか、嫉妬が口々を侵食してきていた。

それでも、昨日嬉しいことがあつたんだ。それは、久しぶりの渡瀬からの遊びにお誘い。家に帰つて漫画を読んでるときに渡瀬からメールが来て、今度の日曜日に遊びに行かないか?つていうメール。今度の日曜日はボクの誕生日もある。渡瀬には誕生日のことなんてしゃべつてないから、こつして誘つてくれたのも偶然なんだろうけれど、それも運命が味方してくれてるみたいですごく嬉しい。もしかしたら、今日は三浦とじゃなくてボクに話しかけてくれるかな?つて言う期待もあつたんだけど、全然期待はずれ。

今日も三浦とばかりしゃべつてた。昨日のメールも間違いじゃないかなつて思うくらい、いつもどおりに三浦とベタベタしていった。はあ、気がついたら本日何回田かわからない溜息を吐き出していた。

「どうした?葉山。さつきから溜息ばっかりついてるぞ?」

風紀委員長が、メガネをクイッと指で直しながら聞いてきた。今は人と話す気分じゃないんだけどな。委員長がボクの方を見て全然動かない。というか答えない、この会議も進ませないような雰囲気だ。

「別に委員長には関係ないでしょ?溜息をついてしまつたのはすみません。会議を進めてください。」

「そ、そうか。なんか怒らせてしまったみたいで悪いな。まあ、人間なんだからため息をつきたい時もあるんだろうが、今は会議中だから気をつけてくれ」

居心地が悪いそうに黒板に向き直り、今日の会議の記録を自分でとり始めた。いつもは書記にやらせている作業なのに自分でやるなんて、かなり動搖しているんだろう。

こんな言い方しか出来ないのもボクの悪い癖だ。ホントに一言多い。自分でだめなことだつて分かつているんだけど、染み付いてしまった癖つて言うのもなかなか抜けてくれないみたいで、これもボクの悩みの一つになっている。まあ、これでも渡瀬のお陰でだいぶとマシにはなつてきているんだけど。

はあ、さつきとは違う意味で心の中で大きなため息をついた。

風紀委員会も終了して今は午後5時半。

結構遅くまで会議をしていた。まあ、ボクは上の空で話なんてあまり聞いてなかつたんだけど。これもいけないことだつて分かつてたんだけど、委員会の仕事のことじゃなくて、ずっと渡瀬のことばかりを考えていた。ほんと、罪な男だよ。このボクをここまで悩ませるんだから。

会議の間ずっと聞こえていた吹奏楽の演奏の音楽がいつの間にか途絶えていた。もう下校時刻になつていてし吹奏楽部の練習が終了していたつて全然不思議じゃない。けど、誰ともすれ違わない廊下は静かでとても寂しい雰囲気だ。

カツカツカツと、ボクが歩く足音だけが響いていてこの学校にはボク以外の誰もいないみたいな気分になつてくる。

早く荷物を取つて家に帰ろう。動かしている足がすこしずつ速くなる。誰も居ない学校つて、すこし想像しただけで結構怖くなる。実は後ろを向いたらお化けが居るんじゃないかとか、誰も居ないは

ずなのに誰かの視線を感じてしまつたりとか、ホントはそんなこと無いのに、すこしの想像でそんな幻想まで抱いてしまう。というか、実際この一人ぼっちの空間つていうのを自覚してしまつて、想像もしてしまつて結構怖い。ボクは、この空間から早く脱出してしまつたかった。早や歩きをしていたはずの足がいつの間にか駆け出してしまふくらいに。

会議室から自分の教室まで歩いたつて5分とかからない。けれど、走つてきたボクは1分とかからず自分教室に到着していだ。走つてきたせいで、すこし息が荒いけどそんなの気にしていられない。というか、早く外に出て誰かに会つて安心したい。勝手に自分で想像して怖がつてゐるだけだけど、それでも怖いものは怖いんだ。ボクは教室のドアに手をかけて乱暴に開いた。

開いた向こうの景色は予想に反して、人影の姿があつた。これもある意味怖い。けど、そんな恐怖なんて氣にならないくらいボクはその姿を見て動搖していだ。

「よー委員会かなり遅かつたんだな?まあ、良いや。待つてたんだよ。一緒に帰らないか?」

片手を挙げながらこちらを向いている男子が一人。傾いた日が差し込む少し赤い教室に一人ぼっちで渡瀬がイスに座つていて。ずっと考えていた人物が目の前に現れた瞬間だつた。

彼の周りには誰もいない。いつたい、いつから教室にいたんだろう?ずっと一人で待つてゐるなんてボクには無理だ。だけど、渡瀬はやさしいから、人から頼まれたものは嫌な顔をしながらもしつかりとやつてくれるし、期待にちゃんと答えてくれる。そう、彼はやさしい。誰にでも:

けど、ボクは今日待つていてとか頼んでないのになんてだらう?
「なにしてんの?一人で放置プレイごつこ?変態さんだね。それより、三浦は?いつもべつたりなのに珍しい」

ほんとは待つてくれてうれしいとか言いたい。けど言えない。

それに、渡瀬のせいでボクはずつとずつと悩んでゐるのに、なんだ

か目の前でへらへらと笑っているのが気に入らない。なんだか意地悪をしてしまいたい気分になっていた。

「いやいや、そんな変体さんなんてこと絶対に無いからなー・三浦なんだけど、なんか俺と一緒にずっと待ってたんだけど、用事があるみたいでちょうど30分前に帰ったよ。っていうか、委員会つて結構遅くまでやつてるもんなんだな？女の子一人で帰すにはちょっと遅すぎな気がするんだけど。あと、葉山の俺に対する言葉遣いつてだんだんひどくなつてないか？」

ボクの言葉遣いに怒っている渡瀬だけれど、そんな態度は眼に入らなかつた。『三浦が帰つた』ということを聞いて、心の中でほつとする。ほんと三浦はずつと渡瀬にべつたりで、そのせいでなかなか渡瀬に近づけない。話したいのに話せないという状況を作つてしまつている張本人だ。三浦としてはそんな悪気は無いんだろうけど…

そしてなにより、渡瀬がボクを心配して待つていてくれたという事実がとても嬉しかつた。

「ふーん。まあ、ボクは三浦さんにが居ようが居まいが関係ないけれどね。渡瀬がどうしても一緒に帰つてほしつて言つなら一緒に帰つてあげても良いけど？」

ボクのそんな可愛げの無い言葉を聞いて、何を思ったのか渡瀬はニッとした。その『素直に言えば良いのに』つていう笑顔にちょっとムッとしたけど、きちんと気持ちが通じたみたいで安心した。

ほかの友達とかには徐々にではあるんだけど、素直に言葉を言えるようになつてきてると思う。けど、渡瀬に関しては1年の3学期の終業式から何も変わつてないと思つ。むしろ、自分の気持ちを自覚してからは悪化してしまつてゐる気がする。まあ、渡瀬は気にしてないようだけどボクはちゃんと直したいと思つてる…直つてないけど。

「はいはい、それでいいから帰ろ」

座つていたイスから立ち上がり、ボクのカバンを持ってこつちに歩いてきた。ほい、とボクのカバンを差し出した手には、頬杖をつ

いていた跡がくつきりと残っていた。

渡瀬はこの教室で一人なにを考えながらボクを待っていたんだろう? というよりも、どうしてボクを待っていたんだろう? いつもなら、部活をしてない渡瀬はホームルームが終わったらすぐに変えるはずなのに。やつぱり三浦と話していたのかな? そう思うと、心の奥で醜い塊がじわじわと広がってくるのを感じる。けれど、それ以上に嬉しい気持ちが勝っていた。どんな理由で待っていてくれたつて関係ない。待っていてくれたつて言う事実は変わらないんだから。

『いつたい何時間待っていたの?』『ほんとに君は優しいね。』いろいろとかけたい言葉が浮かんでくるものの、それを口に出すことは無かつた。搾り出せた言葉は一つだけ。

「…ありがとう。」

「俺が待ちたいから待つてただけだから、葉山は気にすること無いつて。」

渡瀬は、ボクにカバンを渡すとスタッタと、先に歩いて行つてしまつた。その後姿は、大きくて、やさしくて、ボクには届かないくらい遠くに感じた。

これが、ボクと渡瀬の距離。近いようで、本当は全然近くない。けれど、全く届かないほど遠くない。この距離が今のボクにはもどかしい。すぐにでも手が届くような距離にボクは居たい。すぐにでも、渡瀬に触れられる距離にボクは居たい。

少しでも近づきたくて、すこし駆け足で渡瀬を追いかけた。

梅雨が終わり本格的に夏に変わつていこうとしている今日この頃、太陽が沈むのが少しづつ遅くなつてきて昼間の時間が延び始める。ま、そろはいつても今日はすでに太陽がだいぶと傾いていて僕の目の前に広がる風景は全て赤い色に染まつていて。

ボクは今、渡瀬と一緒に下校中だ。約束したわけではないけど、渡瀬が待つていてくれたからこうして帰れる。だけれども、なぜか会話が無い。

色々と話したいことがあるのよ、どうしてか口からその言葉が出て行かない。っていうか、渡瀬といつして一人きりになるのも久しぶりだ。だから、変に意識してしまってボクから話しかけることが出来なくなってしまっていた。けど、渡瀬から話しかけてくることも無い。こうなつてしまふと、ボクと居るのが楽しくないのか不安になつてしまふ。おそるおそる渡瀬の顔を見るけど、ずっと何かに悩んでる様子だ。というか、待っていたくせに自分の世界に浸つてしまつている渡瀬に少しライライラしてしたりする。

「なに悩んでるの？ その小さい頭で答えが出る問題なんてないだろうから時間の無駄だよ？ なんだつたら、ボクが相談に乗つてあげようか？」

「ヒドー！ なにそんな言い方しなくてもいいじゃん！」

「ボクをほつたらかしにした罰だよ。」

ふいつとそっぽを向いているボク。その横で、なにやら「一ヤ一ヤ一ヤ」としている渡瀬。全く、ボクと居るときの「こいつは一ヤ一ヤする」とが多い。こいつとしては欣然としない気分だ。

「何よ？ 一ヤ一ヤして… 変体面してるわよ？」

「別に一ヤ一ヤしてるつもりもないし、変体面は元からだ…。自分で変体面つて言つてチョットへこんだし…。まあ、俺のことは置いていて、葉山が少しずつだけど、本音を零してくれる様になつたのがさ、うれしくてな。」

はて？ ボクは本音なんて零したのだろうか？ 渡瀬はと黙つて、わからないのか？ と言いたそうな顔をしてくる。

「ボクは渡瀬が一ヤ一ヤするような事言つてないよ。」

「だから、一ヤ一ヤしてなっての…。葉山は俺が一人で考え事ばかりだから、ほつたらかしにされて寂しかったんだろ？」

いわれて気がついた。『ほつたらかしにした罰だよ』 たしかに、

ボクが言つた言葉だ。…たしかに、ほつたらかしで寂しかつた。自分でもびっくりするくらい素直に言つてしまつていて。顔の温度が上昇するのが自分でもわかるくらいにカツと上がつた。

「葉山、顔真つ赤！」

笑い声を抑えよつともしないで、大きな声で笑う渡瀬。

「夕日だよ！夕日の赤が顔に映つてるだけ！…つていうか、見るな！…」

いつもの無表情を保つことが出来ずに、叫んでしまつた。

まつたぐ、渡瀬を相手にすると自分のリズムが崩されてしまつ。たぶん、これは良い事なんだろうな。無意識に自分の気持ちを相手に伝えることが出来るようになつてきていて、言つ事實がとても嬉しかつた。

カバンを振り回しながら追いかけるボクから逃げるよつて前を歩く渡瀬。

こういつ風に渡瀬とじやれあつのも久しづりだ。最近は何かにかけて三浦が渡瀬にべつたりくつついているし、下校も三浦と帰つてゐたいだし。休み時間も渡瀬と三浦はべつたり。まあ、見てる限り、三浦から渡瀬にくつついて行つてゐるみつだ。

三浦が現れる前は毎週のようすに、土曜日か日曜日はふたりで買い物とかにも行つていたんだけど、渡瀬が三浦とべつたりくつつきだしてからは全然なくなつてしまつた。本人に聞いたら付き合つてゐわけじやないつて言つてゐるんだけど、第三者目線で見るとれつきとしたカップルに見える。

三浦と土日に会つてゐるんだと思うと、胸が苦しくなる。どんどん自分が嫉妬に飲み込まれていつてゐるのがすぐ嫌だ。

自分はこんなにも嫉妬深かつたのかとか思うようにもなつてしまつた。はあ、心の中で溜息を吐き出す。渡瀬は優しいから、委員会で遅くなつたボクを心配して一緒に帰つてくれてるんだと思う。けれど、そんなやさしさもボクだけに向けられてゐるものじやない。もし、今日のボクの立場に三浦が立つていたとしても渡瀬は同じこ

とをしていたんだろうと思つと、今の嬉しい気持ちも小さくしほんでしまう。今この瞬間は、渡瀬を独り占めできたとしても、又明日から三浦とベタベタするのかと思つと、うれしい気持ちが大きいほど落胆もひどくなる。

悲しくなるくらいならはじめから優しさなんてボクが拒絕すれば良いんだけど、ボクはそんなに強い人間じゃないからこの小さい誘惑もうち負かすことはできずに「うう」と、甘んじて受けてしまつてるわけだけど。

ひとり、うれしくなつたり、悲しくなつたりをしていたら渡瀬が振り向いて話しかけてきた。

「葉山に聞きたいんだけど、カレー ライスつてあるじゃん？あれつて、『ご飯にカレーが乗つてるからカレー ライスになつてるわけだろ？』っていうことは、カレーに『ご飯をかけたらライスカレーになるのかな？』

こいつは、いきなりこんな話題を振つてくる。いつものも久しふりだ。

けれど、

「くだらなさすぎる。」

率直な感想。

「はあー？ そんな答え聞きたいんじゃなくて、カレー ライス、ライスカレー どっちなんだよ？ これを聞かなきゃ俺気になつて夜も眠れ

ねえよ！」

「どうせ、かき混せて食べるんでしょ？ じゃあ、どっちでもいいじゃん。つていうか、あんたの頭の中身もぐちゃぐちゃにかき混ぜたらちよつとはマシになつて、こんなくだらない質問してこなくなるんじやない？」

ガーン、そういうとあからさまに落ち込み始める渡瀬。

ほんと、人が真剣に悩んでるつて言つのに、そんなこと聞いてこないでよ。なんだか、三浦が現れる前に戻つたみたいで嬉しくなるじゃん。どうせ、また月曜日から三浦とベタベタしてくるせに。そ

う思つと、もつと意地悪な気持ちになつてきた。

「じゃあ聞くけど、ハヤシライスのハヤシって、ハヤシさんが作つたからハヤシライスって言われるみたいなんだけれど、じゃあ、カレーライスはカレーさんが作ったからカレーライスなの? あともう一つ。ありえないけど、もし、焼肉にカレーをかけたらカレー焼肉になつてしまうの? むしろ、カレーに焼肉をかけたら焼肉カレー?」

「え? 作った人名前? カける順番? カけるもの? ……」

渡瀬は念佛のように同じ言葉を繰り返し咳き始めて、最終的には頭から煙を上げながら機能を停止してしまつた。…数秒後には復活してたけど。

「葉山、あんましあいやここと言わないでくれよ。頭こんがらがつちまつたよ。」

「じゃあ、くだらなこと考えなこの。ビーフカレー、おこしく食べれたらオッケーじゃん。」

「まあ確かに。けど、名前つて結構大切だと思つけどなあ」

「名前の前後を入れ替えたくらいでそんな大げさな…まあ、ドライカレーとカレードライじゃ全然イメージが変わつてくるナビね。」

「だろー! だから、大切なんだってば。」

こんなくだらない会話でどうしてこんなに楽しいんだろう? 渡瀬もすこく楽しそうに見える。ボクの目がおかしいだけかもしれないけど、三浦と居るときよりも楽しそう。こんな会話は渡瀬とじやないと樂しくないんだろうな…。

渡瀬とだから樂しい。そう実感してゐる自分。こうこうとを自覚してゐる時点で、ボクは渡瀬にそつとう参つてしまつてゐるんだろうね。そんなくだらない会話をしていたら、急に少し真剣な声で渡瀬はしゃべりだした。今までの会話なんて、関係なしに全く違う話を…「あのむ、昨日脳メールして約束した日曜日なんだけど、用事が出来て葉山と遊べなくなつたんだ…ごめんな。」

グサリと、胸に何かが刺さる音がした。体が急に油をさしていない

機械みたいにギシギシと音を立てて動けなくなる。イツタイナーライワレタンダロウ？頭の中では理解しているのに、心が拒んでいる。だけど、ボクの口は自分の意思とは関係なく動いていた。

「最近、三浦とつるみだしてから、全然出かけて無いじゃん。だから、今更だよ。別に渡瀬と出かけるのが楽しくて出かけていたわけじゃないじゃん。ボクの『無表情』とか『口の悪さ』を直すために手伝ってくれてたわけでしょ？それに最近そのリハビリも無いってことは、渡瀬が見る限りだいぶよくなつてことじやないの？だから、無理にボクを誘つて遊びに行かなくても良いんじゃない？」

もう、何も考えられ無かつた。ただ、自分の言葉なのに、第三者として聞いているような不思議な感覚。もう心が動いていないんだ。だから、何も感じない。多分、いま心が動き出したら壊れてしまう。「前に比べたらだいぶよくなつたよ。けど、まだまだだとは思うんだ。ここ最近は色々あって、遊びにいけてないけど、久しぶりに葉山と出かけたって思つてたんだけどさ。用事が入っちゃって、ほんと俺もかなりガクつてきてるんだけど」

「だから別に良いって…今日はここで良い。送つてくれてありがとう。ばいばい」

渡瀬はまだ何かを言いたそうだった。けれど、それを聞くような余裕は今の僕には無い。

もう限界だつた。もうこの場所に居たくなかった。早く渡瀬と離れたかった。もう家も眼と鼻の先立つたし。ここまできたら送つてもらう意味もない。

ほとんど走つてしまつていたと思つ。渡瀬の横を抜けると一旦散に自分の家に向かつて走つていった。

どうやつて、鍵を開けて家に入つたのかすら覚えてない。気がついたら自分の部屋のベッドの上でうずくまつて泣いていた。

会えると思つていたのにそれを裏切られてしまつた。期待を多い多分落胆が物凄く大きい。久しぶりに会えるつて言つのんでボクが舞い上がりすぎたんだ。

『今度はいつ会えるの?』って聞きたい。『ほんとはずっと一緒にいたいよ』って言いたい。だけど、ボクにはそれを言ひ資格がない。だって、『カノジョ』じゃないんだから。

ボクは、彼のトクベツになりたかった。

春休みに入る日に、ボクは渡瀬に告白された。

別に、告白されたから好きになつたって訳じゃない。休みの日にふたりで遊びに行つたりとか、渡瀬の家に花を買ひに行つたりしてるうちに気がついたら好きになつっていた。何をするにも渡瀬のことを考えてしまう。はじめは何かの病氣かと思つたくらい。

渡瀬のお陰で少しだけマシになつた言葉遣いと態度で、2年生になつてやつと友達と呼べる人も出来たし、学校生活も楽しいと感じれるようになつてきていた。渡瀬のお陰でボクの生活は確実に良い方向に向かつていたんだ。

2年生になつた5月くらいからかな、渡瀬の周りに三浦が付きまとい始めたのは…始めは恋愛相談みたいなことで渡瀬に話しかけていたのを記憶してる。それでも、休みになつたら一人で出かけたりするのは続いていた。渡瀬とならどこへいっても、なにをしてても退屈なんて感じなかつたし、心の全てが満たされていて充実していた。

それが、6月に入つてからはばつたりと無くなつてしまつた。ボクから誘つたりとかは全然してなかつたんだけど、いつもなら休み時間に『次は何処へ行きたい?』とか話しかけてくるはずなんだけど、ボクのほうへは来ないで三浦とずっと話していた。

最近の様子を見ていると、渡瀬はぼくに愛想をつかして三浦のことが好きになつたんだと思う。だって、休み時間もずっとしゃべつているし、一人で帰つているのよく見かける。たぶん、休みの日に出かけなくなつたのは三浦とあつてるからだと思つ。

渡瀬がボクをずっと好きで居てくれる保障なんてないのに、何に
ボクは安心してたんだろう…
自分の甘さが悔しい。

いつまでも想ってくれて居たなんて思っていた自分が、今の関係
で満足して居た自分が腹立たしい。
こんなに後悔するくらいならば、もつと早く自分の気持ちを伝え
るべきだった。

トントン

突然部屋に、ドアをノックする音が響いた。

「麗？ ご飯だからおりておいで」

お母さんが話しかけてきていた。

「…こらない。」

たぶん、涙声だったと思う。だけど、お母さんは特に気にした様
子も無くこう続けた。

「じゃあ、食べくなったら降りておいでね。」

氣を使って何も無かつたことになれるお母さんの気遣いが痛いく
らいに胸にしみた。

お母さんに声をかけられて氣がついたんだけど、外はもう真っ暗
になっていた。

いつたい何時間一人で泣いてたんだろう？

ボクは、ずっと渡瀬のことを考えて泣いてたんだ。自分でもび
っくりなくらい想つてしまつて。

そこまで人を好きになれた自分が少しうれしい。

ボクは、渡瀬に出会えて本当に良かつたと思う。彼が居なかつた
ら、多分今も一人ぼっちだ。彼が居たらから、ボクは友達を作るこ
とができた。彼が居たからボクは変わることが出来たんだから。

『好き』って言つ気持ちと、『ありがと』って言つ言葉を伝え
たい。

もう、ボクのことを好きじゃないとしても、ボクの気持ちを聞い
たい。

てほしい。

もう、ボクの事見てくれないとしても、ボクの気持ちを分かつてほしい。

たとえ、ボクの気持ちに渡瀬がこたえてくれなくててもこの気持ちを伝えよう。そうしないと、ボクは前に進めないから。

読んでいただきありがとうございました。『意見』、『感想』などがあればよろしくお願いします。わたしが喜びます。

太陽は今日も自己主張が激しいみたいで、見事に晴れた土曜日。ノースリーブにバニューダパンツ、頭にはすこしきりと、日焼け止めを肌に塗ったんだけれど、全然太陽から肌を守ることは出来ないみたいで、じりじりと肌を焼いていた。はあ、袖の無い服なんて着るんじゃなかつた。

それに、太陽だつて少しくらい曇つていてくれても良いと思う。ほら、そこの中学生も言つてるじゃない「もつすこしきりと太陽はサボつてくれたほうが良いのにね」つて……まあ、実際にサボられたら地球が滅んじゃうんだうけど。

さて、どうしてボクがここにいるかと言つと、それは明日の渡瀬との対決の準備の為だ。昨日、散々悩んだ末に出した結論。それは、渡瀬にこの胸のうちの思いを思いつきり打ち明けてけじめをつけること。明日、ボクの誕生日に渡瀬に告白する。けど、今持つてる服は全部一度は渡瀬の前で着てるから、今日新しい服を買って、新しい服で勝負を挑むつもりだ。

どれだけ勝率が低くとも、少しでも勝率が上がるならそれを実践する。断られるつて分かっていても、断られたくないつて思つし、渡瀬の隣はボクがずっと独占していい。その為なら、ボクはなんだつてする。それくらい、もう渡瀬でいっぱいだつてことに昨日気がついたんだ。

それに、明日の勝負服を選んでもうつ為に日は助つ人を呼んでいるんだ。渡瀬のお陰で友達になれた人、田原真紀。

最近では真紀つて呼び捨てに出来るくらい仲が良くなつた。ボクの毒舌も全然気にしないみたいで「ぐく付き合いやすい子。たぶん、女友達の仲で一番の友達。

約束した時間は12時丁度に駅前の噴水。

現在の時間は12時を少し回つたところ、そろそろ来るとは思つ

んだけどじつと待ってるなんて退屈すぎる。それに、暑苦しいくらい輝いている太陽がボクの体力を徐々に削つてる。噴水なんて日のあたる場所を待ち合わせ場所にするんじゃなかつた。そんな後悔が頭をよぎる。けれど、この駅前は噴水以外に目印になりそうな場所なんてほかに無かつたから仕方が無い。

待ち合せにしてた噴水の前のベンチに腰を降ろして駅のほうを眺めていると、携帯を片手に持つたサラリーマンが忙しそうに早や歩きをしていた。

そんなに急がなくとも良いんじゃない?って思つてしまつほどいの速さに少し興味深く見つめているボク。この暑い中、多分取引先に向かう途中なのだろうサラリーマンに軽く同情していた。

「こんなに暑いのにがんばつてるんだ……けど、暑苦しい」

けど、口からこぼれた言葉には一言無駄なことが入つてくる。こんな自分の口が嫌いだ。

「こら、そんな事言わないのーあのおっさんもがんばつて働いてるんだからーたとえ暑苦しいと思つても、言つてはいけないよ？」

不意に後ろから声が聞こえた。

腰に手を当てて一ヵつと笑つている真紀がいた。

「人に説教する前に、真紀遅刻してるよ?」

全然悪びれた様子も無く、舌を出して笑つている真紀。

「まあ、いいじゃん。ちょっとくらい。それよりさ、『飯食べに行こうよ!走つてきたからおなかペコペコだよ』

自分に都合の悪い話題をどこか遠くへ放り投げて、自分の欲求に忠実に行動する。

自分の感情をストレートに表現する真紀は裏も表も無い、そんな真紀がすこしだけうらやましかつたりする。

ボクの正反対の性格だ。

「ほりーぼうつとしてないで行くよ?」こんな暑い中、陽が当たるとこうなんて居たくないしね

「……その陽の当たるところです」と待たされてたボクはどうなんのよ?」

「細かいことは気にしないー。そつだねえー涼しくなるもの食べに行こー!」

ボクの右手を取つて歩き出した。ふいに振り返つてボクの顔を見て「ほら、そんなにふてくされてないでさ、遅れたことは謝るからその仮面やめなよ」

「別にふてくされてないから、もともとこの顔なの。仮面でわるかつたわね!」

「わかってるよー。言ってみただけだから、気にしないで。前だつたら怒らないで無表情だったのにね。人は変われば変わるもんだね」屈託の無い笑顔で笑つてる真紀を見ると、怒るのも馬鹿らしくなってきた。それに、その笑顔を見るとこっちまでつられて笑つてしまつ。

「人のことからかつてないで、さつさとお皿食べよつよ。ボクもおなかすいてるし」

ボクは真紀に引かれている手を払つて、真紀の横に移動した。やつぱり、友達と肩を並べて歩くのってすごくうれしい気持ちだ。今まで、友達なんて居なかつたからすごく新鮮だし楽しい。

「じゃ、ざるそばでも食べに行きますか!」

「賛成!」

ボクは右手を上げて返事をしてあげた。

その様子を見た真紀は又笑い出した。

ボクもつられて笑えてくる。

真紀といたら笑がたえないな。もしかしたら、渡瀬はこいついう子の方が好きなのかもつて考えてしまう。

渡瀬と真紀が一緒にいるところはたまに見かけるしね。

まあ、今は考えても仕方ないし、とりあえずお蕎麦屋さんを探しますかね。

「は、某うどん屋さんのチーン店。」

トレーを手にレジまでに並んでいる揚げ物やお刺身などのおかずを取つていて、最後にレジにて支払いを済ますシステムのお店。だから席を取るのが一番最後になるんだけど、もし満席だったらどうするんだろう？そんな疑問が頭の中を駆け巡つたんだけど、特に心配する必要も無かつたみたいだ。

先に会計を済ました真紀が窓際の席から手を振つて待つていた。

「おーい、うつちこつちー！」

「そんな大きな声を出さなくともわかるから、かなり見られてるよ？」「うつちが恥ずかしいよ」

何気に、店の中の注目を集めてしまつていた。

だつて、手を振つてるだけでも立つて、その上大声で呼ぶんだよ？当たり前に立つよね。

ボクは早足でテーブルまで行つて、真紀の向かいに腰を下ろした。

「まあ、細かいことはいいじゃん。で、食べよ」

そう言つて真紀は割り箸を割つて食べ始めた。

「真紀、うどん屋さんなのにざるそばつて……」

「まあ、気にしない気にしない。なに食べよ？が、客の自由でしょ？おいてあるんだから別にいいんだよ。ほら、レイも食べなことさるううん私が食べちゃうよ？」

「うううと笑いながらジョーダンジョーダンつて言つてる真紀だけだ、今の一瞬は田がマジだつた。早く食べないとホントに食べられてしまふ気がする。ボクも割り箸を割つて食べ始めた。

「でも、今日はどういう用件なわけ？レイが私を遊びに誘つて珍しこしね」

「ずずーっとそばをすすりながら真紀が尋ねてくる。いつたうういう風に言つたらいいんだろ？明日告白するからその時用の服を選んでほしこうて言つの？それじゃあ、告白するのバレバレじゃん。」

別に、告白すること自体はばれても全然問題は無い。けど、真紀の性格を考えると絶対にその現場で生で見たがるからあんまり言いたくないんだけど。

「ん~、そんな無表情で悩まないでよ。ていうか、私に用があるのにその用を言わないうつておかしくない?」

真紀はジト目でこっちを見てくる。……そばをすすりながら。

「まあ、言いたくないなら言わなくても良いんだけどね。私も暇だつたし、たまにはレイと遊びに行きたいし。それにさ、私呼び出した用つて渡瀬君がらみでしょ?」

真紀の『渡瀬』という言葉に口々口が暴れる。いきなりの不意打ちで、口々口が揺れる。けれど、ここで動搖してしまつたら真紀の思つ壺だ。ここは落ち着かないと。

「そ、そんなわけないじゃん! なに言つてんのよ」

動搖が心の中から抜け出して、言葉に乗り込み真紀に向かつて発信してしまつた。ほんと、いつもどきにいつもの無表情、無感動が出ればいいのに、いつもどきに限つて感情が表に出てしまつ。 プツと噴出す真紀。笑いをこらえるように下を向いてしまつた。

けれど、真紀はどうして渡瀬がらみで呼び出されたつて言つのがわかつたんだろう? そんなこと、昨日誘つときも今日会つてからも一言も言つてないのに。それどころか、昨日の連絡から今まで渡瀬の名前は一度も出していない。もしかして、真紀は超能力者なのかもと真剣に考えてしまった。

真紀を見ると、もう笑うのをこらえるのをやめて普通に笑つていた。

「カマかけてみたんだけど、あつさり引っかかるなんてね。いつものレイじゃ考えられないよ。いつもはクールにスルーするか受け流すかするのに、渡瀬君がらみになると人が変わつたかのように素直になるんだから。カワイイね」

最後の言葉は、とりあえずおいておいつ。真紀はたまに意味不明なこと言つから。

「別に、クールとかそんなつもりはないし、渡瀬がらみだからってべつに素直になつたりしてないよ？ていうか、カマかけたのね……」「「めん」「めん、冗談のつもりだったのに図星とかホントに偶然だからね」

田に泪をためて笑う真紀を見ると、怒る気力もなくなつてくる。

これもある意味真紀の魅力だ。

「それで、渡瀬君がらみで私に用事つてなあに？」

真紀はすうとい一や一やしながらじつに迫つてきた。ものすうとい威圧感だ。

なんか手もワキワキと動かしながら体」と迫つてきて近づいてきているつていう錯覚までおこ……つてほんとに体」と迫つてゐし！「テーブルに体を乗り出さないのーもひ、高校生なんだから少しは考えなさこよ」

「あれー？もひと取り乱すと思つたのに全然クールねえ。やつぱり渡瀬君がらみじゃなきや取り乱さないか……ふむふむメモメモ」ぱぱつと自分の席にもどるとカバンから手帳を取り出し、本当にメモを取り始めた。

「で、用事を早く言いなよ」

メモをいつでも取れる体勢をとつて、ボクに催促してくる。なんだかすういく言いたくなくなつてきた。田がキラキラしてゐる真

紀がすういくムカつく。ボクは真紀のおもちゃなんかじゃないし。

「やつぱり言うの辞めた。今の真紀見てたら、どう転んでも真紀がおもしろがるだけだもん。これでもボクは真面目に悩んでるんだから、そういう風にされると嫌だ」

「ぐはあー、なんか今グサツときたよ？ひどくない？」

わざとらしく泪を貯めてじつちを見てくる。

そんな顔されると、ボクが悪い子とした見たいじゃん……ん？なんだろ？右手に田薬があるよつな……

「……真紀？」なにその田薬」

「あれ？もうバレちつたか？いやあー冗談だよ冗談」

「なんか罪悪感じた自分が馬鹿みたい。真紀なんて馬鹿でも踏まれたらいしよ」

舌を出しながらおどける真紀。

せつめとは違つて今回はちよつとマツと来た。ちよつとやせつとじや許してなんてあげないんだから。

「ほら、ちょっとさるそばあげるから機嫌直してよ
もうそんなものなんかで釣られるボクじゃ……

「レイちゃ～ん、ほつぺたが緩んじゃつてるよ～

「緩んでない！」

「嘘だね。もう、シンデレだねえ～。怒つてる振りも大概にしない
と、渡瀬君にも勘違いされるよ～」

「え？」

「だ～か～ら～、ちゃんと態度で示さないと人には伝わらな～によつて言つてんの」

いつの間にか真紀はまじめな眼差しでボクを見ていた。
その瞳は真剣そのもので、ボクの心なんて全て見透かしてしまってそう。

「ほら、言つてみ」

ふいに、表情をやわらかくしてボクに話を促してくれる。

どうしてだろ、なんでこんなにボクの心にすりつぶつと入つてくれるんだろ。

どうして、こんなに、こんなに優しいんだろう？

今聞かれてることは昨日の「じじやないのに、昨日のことを思つて想つてしまう。

昨日たくさん泣いたのに、また、涙が出来になる。

そんな顔を見られたくて俯いてしまった。今しゃべるといらないことまで言つてしまいそう。

自分の意思とは関係なしに暴れる心を押さえつけないと、また泣いちゃいそう。

「まあ、今は無理にとは言わないけど、この食事が終わるまでには

今日の用事教えてね

そういうて、ボクの頭を優しくなでてくれた。

「んなちいせなことが、今のボクにとつては涙腺というダムを決壊させる爆弾。決壊したダムのよつて田からは涙がとめよつも無く流れてくる。

真紀はボクが落ち着くまで、頭をなで続けてくれた。

「まったく、君はかわいいね」

そういうながら、なで続けてくれたんだ。

「なるほどねえ～、自分の誕生日に告白すると。あわよくば、渡瀬君が自分への誕生日プレゼントのことへ。」

「そんなんじゃないつてばーーー一つの凶切りつて」と、自分で納得したいだけ。

少し前にやつと泣きやんだボクは、真紀こつれられて喫茶店へ来ていた。

さすがにうどん屋さんであるような話ではなくつてきてるし、周りから注目されるようなアクションも起こしてしまったわけだから懸命な判断だとは思う。

けど、喫茶店に移動してからずつと真紀からの質問攻めはどうかと思ひ。で、とうとうじやべつてしまつたし。

「ふ～ん、まあ聞いてしまつた手前、ちゃんと服選びに付きましたから安心しなよ」

ぱちっとウインクまでくれてしまつ始末。

「やる気満々なのはうれしいけど、ちょっとつやーーー」

「またまた～、内心うれしいくせに素直じゃないんだから」

ボクの言葉遣いにも動じなくて、真意を読み取つてくれるのはかなりうれしいんだけど、つやーーのはちょっとほんとだつたり……ちよつとうござこくらで接してくれないとそつけなくするから、

すぐ人がボクの周りからいなくなっちゃうんだけどね…

「まあ、今日は服選びを手伝ってもらつたのと、グチを聞いてもらおうともつただけ」

「そつかそつか、私はレイに愚痴を言つてもうべつに信用されてるつて事か、なんか照れるね」

はにかむように笑う真紀は、同姓のボクがみてもかなり魅かれるよつな魅力がある。

こんな笑顔を見せられたら男子はひとたまりも無いんだろうな。

「まあ、信頼してなつてことは無いよ。真紀だしね」

とにかく、勝負は明日なんだ。今日はその準備をしなくちゃね。明日どんな結果になつても、後悔が無いようにがんばらないと真紀に申し訳ないし。

「なんか含みのある言い方だなあ、まいいや。とりあえず、服買いいにいこつか」

そういうと真紀は立ち上がり、会計をするためにレジへ。ボクもそれに習つて、レジへ向かつた。

「今日は、私のおじりね。かわいいレイ見せてもらつたから、それで充分おなかいっぱいだよ」

「なつ、なんでそうなるの！？」

真紀は笑つて何も言わなかつた。

真紀なりに応援してくれてるつてことにしあつて。そうしないと、ボクの精神が持たないかも。

ボクと真紀が向かつたのは近くのデパート。

それからの真紀はすごかつた。

ボクの体力が尽きるまで、服屋という服屋を見て回り、その服屋にある服でボクのサイズに合つ服は全てボクに並んで似合つてか見ていた。

見た服の数は多分3桁に達しているかもしない。けど、それはボクの体力が尽きたからであつて、真紀いわく『このデパートにあ

る服で一番似合つものを買おうね』って最初に言つてたから、ホントに全部の服を見ようとしてたかもしれない。

数ある服の中から選ばれたのは、うすい水色のワンピース。

そして、今は『パートの中にあるフードコートで一休み中だ。

「あのさ、ボクはカッコいい感じの服がほしかつたんだけど」

真紀は飲んでいたオレンジジュースから口を離した。

「いやいや、何を言つてんの？ レイにはこういつた服のほうが似合うのよ。普段のイメージとは全く違つて、なんていうか清楚みたいで、だけど可憐なレイ。試着したときに『これだ！』って思った

ね』

そう、ボクはカッコいい服がほしかつたんだ。

それも男の子よりもかっこよくなれるような服。どんなことがあつても、強気で居られるような服が。

だけど、買つたのはワンピース。それも飛びつきり可愛いものだ。

「だけど、やつぱりボクの好みつてあるじゃん」

ボクの抗議をもろともせずに、にっこりと笑う真紀。

「これを着れば、渡瀬君なんていちこうよ！ それに、ほかの男子どもも選びたい放題！ もしかしたら向こうからよつてくるかも…」

きやーっとほつぺたに両手を添えてくねくねする真紀。

正直、ちょっときもちわるいです。

「ボクはさ、付き合つてていうのは両方が好き同士じゃないと嫌なんだよね。だけど、入学当初からうざつたいくらい言い寄られて迷惑してるのよ。それに今は、渡瀬以外とは付き合つ悩なんでもらさら無いのにね」

頬杖をついて、自分のグレープジュースを飲む。

ふと真紀からの視線に気がついてそっちを見てみたら、真紀が一

タ一と笑つていた。

「なにわらつてんの？」

真紀はふふふと含みのある笑いを見せながら口を開いた。

「いやいや、レイちゃんは天然さんなんだねえ～」

「まだに、一タ一タしている真紀。

「いつたいさつきの会話の中で、何処にそんなに一タ一タとわらわるようなところがあるんだろう？

「いやいや、意味わかんないし

「ふうん、いや、ほんとに気がついてないし

「いつそつ一タ一タした顔を辞めない真紀。ちょっとイライラしてきた。

「だから、どこがなのよ？」

「全く、レイは自分の発言に自覚あるの？さつきね『渡瀬以外とは付き合わない』って言ったのよ。それって、『私は渡瀬君が好きです』って言つてゐるようなもんじやない。まったくのわけぢやつて

」

「いやーん、つとせつきと同じようにクネクネする真紀。

そんな真紀を見る余裕は今のボクには無かつた。

しまつた！つといつ、言葉がぐるぐると頭の中で回り続けていたから。たしかに、渡瀬のことは好きだ。けれど、他の人からその事実を指摘されるのはかなり恥ずかしい。

「うわー、レイちゃん真つ赤だよー。いやあー、今日は良いものが見れる日みたいですねえー

自分でも真つ赤なのは分かつてる。けど、全然体が言つことを利かなくて顔の色が戻せない。いつもならこれくらいポーカーフェイスで誤魔化せるのに。

こういう風に自分の感情がストレートに表情に出るようになったのも、渡瀬のお陰かもしれないけど、こうこうときは前のままでよかつた気がする。

こんなの、自分のキャラじゃないし、恥ずかしいし。ほんと、顔から火が出るよつだ。

「もういいじゃんーそんなのーそろそろ出よー。ジュースも飲み終わつたしー。」

ズズーっと残りのジュースを飲み込んで、ボクはここから立ち去

る理由を造っていた。

「あははあ～、飲み終わる前に飲み終わつたつて言われても、全然説得力ないよ。あ～涙出てきた。今日のレイつてば最高だね」涙を流しながら笑う真紀を見て思つ。今日真紀に頼んだのは間違いだつたのではないかと。

デパートから朝真紀と待ち合わせした駅に帰つてきたら、もう周りは赤く染まつていた。

太陽が傾いて大きく見える。昼間は、溢れ返るほど人がいたのに今はぼつりぼつりとしか人がいない。

「あ～つ、たのしかつた！」

「ボクは疲れた」

ボクは対照的なテンションの真紀がちょっと疲れる。

ボクの右手には服が入つた袋がぶら下がつていた。

真紀が選んでくれた勝負服。これで明日の大勝負に勝つ予定。つていうか、勝つとか負けるとかじやない気がするんだけど、真紀が『絶対勝ちなさいよ！』とか言つててちょっとついていけなかつた。まあ、勝ち負けって言つか自分のけじめなんだしね。負けるとしたら、自分に負けるとかかな？

ちらりと左手にぶら下がつてる大きな紙袋を見て、大きな溜息が出てしまう。

「いやあ～、レイもいつぱい買つたねえ～」

「こんなに買うつもりじやなかつたのに……」

「欲しいと思つたら買わなきや損だよ！」

「そう言つてそそのかしてくるから、こうなつちやんだよ！」

真紀がずつとこんな調子だから、ついつい予算を大きくオーバーしてしまつたんだ。

ちょっと良いなつて思つた服を手当たり次第に買い物籠に放り込

まれて、気がついたら服の山が出来てしまっていた。

「これでもその服の山から、さうに好みのものだけに絞ったんだけど、それでも5・6着はあると思う。」

「あ～、次の小遣いの日までまだあるからちょっとの間は、節約生活しないと……」

「まあまあ、自分へのプレゼントだと思つたら良いんじゃないの？ そのつもりで今日、私を誘つて服を買ににいつたんでしょ？」

「いやいや、違うから。渡瀬に告ぐときの服だけを見てもらおうと思つてたのに」

「ふう～ん、そんなこと言つちやうんだ？ 結構ノリノリで服選んでたくせに」

「えつ？ そ、そんなことないよ」

「動搖がモロに表情に出てるんだけど。まあ、可愛いからいいか……あつ！ そうだ！」

「何かひらめいた！ そんな感じでこいつを向く真紀。 そのひらめきがかなり怖い。変な言い出しあうでかなり怖いんですけど。」

「よし！ 帰ろ！ 」

「真紀が何かを口にする前に、わざわざと帰つてしまえばいいんだ。 すこしだけ、良心が傷むけど……」

「ふと、横を歩いていた真紀がいなくなつた。 後ろを振り向くと真紀がうつむいて立ち止まつていた。」

「うわあ～、レイがいじめる」

「こ、これは、マジ泣きだ！」

「大粒の涙を滝のように流しながら泣きじゃくつていた。」

「え？ え？ 今のボクが悪いの？」

「まだもうちょっとあそぼ～よ～」

「幼稚園児のような理由で泣くなよ。」

「心の中で盛大に突つ込みを入れてみるものの、それを実際に真紀には伝えられなかつた。」

さすがに、この状況でそんな冷たい言葉を言つてしまつたりもつと泣きじゃくつてしまつのが、目に見えている。

それに、少ししか痛んでなかつた良心が、激しく痛み出したし。

「わかつたからーもうちょい遊ぶからーだから泣きやんでよー」

「言つたね。遊ぶつて言つたね。言つたからには遊んでもらつから

！」

顔を上げた真紀の目には、もつ涙なんか無かつた。

そして、右手の中には田薬が。

やられた。お匂いはんを食べてるときにもやられそうになつた手にやられてしまつた。

「よしー！とりあえず、渡瀬君ちの花屋さんで行きますかー！敵地偵察は大事だよー」

さつそつと歩き出す真紀に啞然とするボク。

「ちょ、ちょつとまつてよーどうして渡瀬んとこ行くのよー？」

「え？だから敵地偵察だつてばあー」

真紀は、はあーつと大きなため息をついていた。

「ていうかさ、今日の話を聞いてて思つたんだけどさ、レイは渡瀬君に会いたくて会いたくてしそうがないんでしょ？」

ぐさつと、胸に矢が刺さつた気分。

たしかに、本当のことなんだけれども他の人に言われたらかなり恥ずかしい。

「ま、まあそなんだけれどね。けど、もしさ。三浦がいたらどうすんのよ……」

「確かにそつだけどね。けど、会いたいなら会つたほうが良いと思うんだよ。レイはさ、もつと積極的になるべきだと思つんだよね」

「それは、自分でも分かつてゐるんだけど。たぶん、今三浦と渡瀬が一緒にいるのを見たら明日知らする雰囲がなくなると思つかりやめときたいんだけど」

真紀はさつときよりも数段大きなため息をついていた。

「あーもう、わかつた！わかつたわよ。そのかわり、絶対明日告白

しなよ？私はレイのこと応援してるんだから」

真紀の優しい気持ちがひしひしと伝わってきているのがわかる。さつき渡せのトコに行こうとしたのも、ボクが会いたいと思つてゐのを感じたからだ。

応援してくれてるのも、全部全部ボクのため。

こんなに思われてるのはすぐうれしい。けど、今すぐにその気持ちにこたえることが出来ない自分自身にイライラする。

「なあに、今焦らなくても明日が来たら決着つんだからむづちゅうとの我慢だね。私ちょっと暴走してたみたい。ゴメンね」

顔の前で手を合わせて申し訳なさそうな顔をする真紀。

お願いだからそんな顔をしないで。その期待に応えられないボクが悪いんだから。

そう、ボクがこの期待に応えなくちゃいけないんだから。

「今日はありがとうね、真紀。明日、絶対うまくいかすから！良い報告するから待つてね！」

ぽかん、そんな擬音が聞こえてきそうな真紀の顔。

けど、すぐに意味を理解したみたいで、ニコッと笑つてくれた。

「うん！良い報告待つてるからね！」

満面の笑みで笑いってくれた。

その笑顔のためにも、明日ボクは渡瀬に告白する。そんな決意を新たに固めて家路に着いた。

中編（後書き）

評価、感想などがあればしていただけたらうれしいです。 作者が飛び跳ねてよひよひます。

白くぼやけた光景が田の前に広がり、うつすらと見える人影が二つ。

一つはボク、もう一つは渡瀬。

いつたい何の話をしているんだろう？音なんて聞こえない。

ボクは泣いてるの？笑ってるの？わからない。

渡瀬はいつたいどんな表情をしてるの？

目を凝らしたってそんなもの見えない。ただ見えるのは、ボクの胸に抱えてる花だけ。

その花は、小さなつぼみが今にも開きそうなのに、なかなか開かない。

だけれど、きっと花が咲いたらとても綺麗なんだろうな。

それが見たいと思った。けど、そのときに隣に渡瀬が居たらもうと素敵なんだろうな。

もつと、花を見たくて、渡瀬に近づきたくて、駆け足で一つの人の影に向かつて進んだ。

渡瀬は、ボクに気がついたみたいでこちらを振り向いた。だけど、渡瀬の表情なんて見えなかつたんだ。……そこで、目が覚めてしまつたから。

いつたい、最後に渡瀬はどんな表情をしていたんだろう？

それがとても気になった。

今日はボクの誕生日だ。

さつき見た夢が頭から抜けて出て行きそうになるのを必死になつて食べ止めようとしていたんだけれど、どうしても食べ止めることができなかつた。一つだけ印象として残つたのは、最後に渡瀬の顔

が見れなかつたこと。もしかしたら、これは何かの暗示なのかもしない。今日、渡瀬に告白しても断られてしまうかもつて言つ予感。そんなものが、頭の中をぐるぐる回り続けて、ボクの決心を鈍らせていた。

そんな感情が渦巻いていても、今日はボクの誕生日。友達からの祝福の言葉をメールで受け取りつつ、『おめでとうメール』に返事を打つていた。

今日から17歳。特に感慨も無く年をとつたという感じ。というか、今更誕生日だからどうのこうのと云ふことは無いんだけどね。

「とりあえず、レイおめでと。だけどね、もうお昼前だよ。誕生日なのにいつもと変わらないわね~」

お昼[1]はんの下[2]じらえをしながらお母さん[3]が「ココココしながら言つてきた。

「ん。ありがと。それより、今日の晩御飯、ハンバーグが良い」「はいはい、いくつになつてもレイはハンバーグが好きだね。腕によりをかけて作つてあげよ~」

ボクの家は、いつからか忘れてしまつたけれど誕生日の日は晩御飯をリクエストしたものを造つてくれるというシステムになつてゐる。そして、お母さんの料理はおいしいからこの日が結構楽しみであつたり。

「そういえば、昨日買つてきてた服かわいいね」

「あ~、あれね。友達に選んでもらつたの」

そういうと、お母さんは含みのある顔を向けてきて

「友達つて、ちょっと前までよく来たりしてた男の子?」
にやあ~つとした顔をしてボクの回答を待つてゐる。

「違うつてば。真紀つていう子だよ。それに渡瀬とは最近遊びに行つてないし」

「なんだ。てっきり付き合つてるんだと思つてたんだけど。レイも隅に置けないなつて思つてたんだけどね。残念」

そういうとお母さんは洗濯物を干していくとリビングから出て行った。

バタンと音を立てながら扉が閉まる。リビングにはテレビの中でしゃべってるタレントの声が響いていた。

その微妙な空間がボクの決心を鈍らせるよつとしてくる。

いつもと同じ日曜日のお昼過ぎの風景。このまま『いつもひつじ』に過ぎれば、もしかしたら渡瀬との関係も今まで通りで続けることが出来るかもしれない。

そんなズルイ考えが頭を支配しようとしてくる。

けれど、本当にそれでボクは満足なの?

満足かどうかなんて問う必要が無いくらいはっきりしてるとなんだ。なのにどうして決心が鈍るの?

それも簡単だ。考える必要すらない。決心が鈍る原因は『恐怖』だ。

渡瀬と今までどおりの関係を壊してしまつかもしれない。渡瀬にボクの気持ちを拒否されるかもしない。

たぶん、今のボクにとってそのことがとてもなく怖いんだ。だけど、このまま今日という日を過ぎてしまつとの気持ちは永遠に伝えられないような気がしてくる。今日は誕生日、ボクにとっては少しだけ特別な日。そんな日に勇気をもらつてこの気持ちを伝えないとボクは……きっと伝えられない。

そういう心の中で思つても行動に起こせないボクは臆病者だ。

お母さんが作つたお昼ご飯を食べた今現在、時計は13時半を指していた。

まだボクは行動を起こせないままだけ。

「ほら、レイ。家でじっくりしてるとだめ人間になるよ? 散歩にも行つてきたらどう?」

同じく、『ひつじ』してお母さんが言つてきた。

「お母さんも、『うるさい』してるじゃん。だめ人間になるよ。」

ぐるりと寝返りを打つて、テレビからボクに向き直った。

「お母さんはね、家事で働いてるから良いのよ。けど、レイはなにもしてないでしょ？ ほら、お母さんの勝ち～」

「にこーっと笑つむ母さんは、どうみても小学校の子供がするような表情だ。」

… 実際は40過ぎたおばさんなんだけれども。いつたら怒りれるから、言わないけど。

「はこはい、じゃあ散歩にでもいけばいいんでしょう？」

半ばやけになりつつも、外に出る口実が出来てしまった。揺らいでいた決意が、まだゆらゆらと揺れているのに外に出てしまつていいんだうつか？ けど、出かけなことには渡瀬に会つこと出来ないし。

まあ、少しひらこ外を歩いた方が良い考えが浮かぶかもしないし、ちやんと出でる心の準備も出来るかもしない。

やう考えると、散歩も悪くないなと思えてきた。それだったら、せつから外に出るんだから、昨日真紀と買つた服でも着ていこうかしら？ そんなことを考えつつ、自分の部屋へ戻つた。

さてそく、昨日買つた服を取り出してみる。

ボクには似合わなそうな真つ白なワンピース。こんなのが似合つのなんて、どこかしらのお嬢様とかくらこだ。

「どうして、こんなのを真紀はボクに着せよつとするかなあ？」

一人で愚痴つてしまつ。自分で似合わないとわかつてるものをわざわざ着るなんてバカげてる。

けど、やっぱり友達が選んでくれた服といつものはうわしこもので、一度くらこ着てあげようなんて考えてしまつ。

やっぱつ、今日はボクにとつてトクベツな日なのだから、少しへらいいつもと違つことをしてしまつても良いのかな？ …… 今日はトクベツなんだ。だから今日くらこ似合わないことをしてもおかしくないよね。

そう一人で勝手に結論付けて、ワンピースを着始めた。

現在の時間は2時を少し回つたところ。

セミの大合唱はすこしだけその音量を落としていた。
家を出てから大体10分くらい歩いたところ。いつもは自転車で
通っているんだけど、久しぶりに歩いてみると結構な距離に感じて
しまう。

そして昨日に引き続き、自己主張が激しい太陽の攻撃が降り注い
でいた。

「あ、あつい……」

お母さんに追い出されるように家を出て、散歩を始めたのは良い
んだけど、行き先設定を間違えてしまった。

どうして、久しぶりに昔遊んだ公園に行こうだなんて思つてしま
つたんだろう。10分前の自分をけり倒してやりたい気分だ。

まあ、目的地の公園は田と鼻の先なんだけどね。

小さいときによく遊んだ公園は、昔と全然変わつていなかつた。
小学生くらいの子供たちが元気にはしゃぎまわつてるのがよく見
える。もともとそんなに大きな公園ではないんだから見えて当たり
前なんだけど。

数少ない遊具には少年少女たちが群がつていて、せながら戦場の
ようだ。

ボクは、日陰になつているベンチに腰をかけてその様子を見てい
た。

「ほんと、子供って無駄に元気よね」

気がついたら、言葉が口から零れていた。

子供たちの保護者が近くにいたんだけども、ボクの発言を特に気
にした様子は無い。

子供たちの保護者たちは日陰には入らずに、日向でおしゃべりを続いている。

こんなに暑いのにどうしてそんな風にしゃべっているのだろう？ そんな疑問が頭をよぎったんだけども、どうでもよくなつて考えるのを辞めた。

さんさんと光り輝いて降り注ぐ太陽、耳をつんざくような大きな大合唱をするセミの鳴き声、何処までいけそうな気がしてくる青空。どれもこれも、夏という季節を精一杯放ち続けている。

だけど、ボクの心はこの太陽みたいに輝いていないし、ボクの感情は驚きや感動の音なんて久しく鳴らしていないし、ボクの気持ちは何処にもいけない大雨ばかりが降っている。

夏とは全く逆の位置にボクは存在している。

原因は何か？

その質問に答えるのは簡単だ。

原因を取り除けば良いんじゃないかな？

それが出来たら、とっくにしてるよ。出来ないから、こんな格好の悪い気持ちを引きづり続けるんだ。

葉山麗、お前は何がしたいんだ？

……ボクは何がしたいんだろう？

一人、自問自答。結局自分の気持ちは自分でさえも把握していい。

ここに来たら、何か結論が出るかもって言つ期待はあつた。けど、実際は家で一人考えているのと変わらない。環境を変えたって、ボク自身が変わつていらないんじゃ何も変わつてないと一緒じゃん。はあ、心の中で一つだけ大きなため息をつく。

ふと、視線を上げると、さつきまで日陰だったところに太陽が当たつていた。

そこには、色とりどりの草花が元気に咲き誇っている。

黄色っぽい花を咲かせている草花が目に入った。

これは、二ツ「ウキスゲ」、ボクの好きな花の一つ。

一つの花は一曰でしほんでしまうんだけど、一つの茎にたくさんつぼみがあつて順番に咲いていくつて言つ花。

『明日があるよ』って励ましてくれてるみたいで好きだ。

たしか、この花も渡瀬の家の店においてあつたような気がする。

ほんと、渡瀬の家の見せにおいてる花は、ボクの好みの花ばっかりだ。

初めてあの店を訪れたときもさうだった。あれは、去年の夏休みごろだつたと思う。

高校1年生になり、今までの自分から抜け出したくていろいろしていたんだけど、何をやつても空回り。だんだんボクの周りから人が離れていくつていた時だ。

あの時は、全然花に興味は無かつたんだけど、渡瀬の店の前を通りたんだ。……あのときは渡瀬の家だなんて知らなかつたけど。

そしたら、ほかの花屋とは違つて花が輝いて見えたんだ。気のせいかもしれないけれど、そのときのボクの目には確かに輝いていたんだ。

そして次に目に入つてきたのは、その花を楽しそうに育てる加奈子さんだつた。まあ、加奈子さんは渡瀬のお母さんだつたんだけどね。

気がついたら、ボクは加奈子さんに話しかけていた。どんなことを言つたのかまでは覚えていないんだけど、とても優しくボクの話を聞いてくれた。

たぶん、そのときのボクの話の方もぶつきらぼうですぐ嫌な気持ちにさせたかもしれないけど、それでもちゃんと最後まで聞いてくれて、ちゃんと答えてくれたつてことがボクにとってはとてもうれしいことだつた。

それからだつたかな？ 加奈子さんのところに出入りし始めたのは

……。

いろいろあつたんだけど、加奈子さんのススメで花に話しかけて、人と話す練習もしたつ。いろいろと、花の勉強もして自分で育て

る喜びとか楽しさとかをいっぱい教えてもらつた。

めげそうになつたこともいつぱいあるんだけど、やつぱりボクも人並みに楽しい高校生活を堪能したい。その一心でがんばつてた様な気がする。

その頑張りに目を留めてくれたのが渡瀬だ。始め屋上に呼び出されて告白されたときは、馬鹿にされたような気がしたし、笑われる気もしてた。けど、あいつの真剣な気持ちとかがあいつの言葉一つ一つから伝わってきて、本気でボクのことを好きになつてくれたんだと感じた。

もつと渡瀬のことが知りたくてボクからお昼ご飯を食べに行こうって誘つたんだつたつけ？そこでもいろいろ話したなあ、渡瀬の嫌いな食べ物とか嫌いな食べ物。

どうしたらもつと人と楽しく過ごせるようになるかとか。確かにのときに、毎週どこかへ出かけながら人と接する練習しないか？つて提案してくれたんだつけ？

毎週出かけるようになつて、渡瀬としゃべるようになつて、そのお陰でボクは2年生になつてから、友達が出来るようになつたんだ。ほんと、渡瀬には感謝してる。この気持ちは本当だ。

けれど、2年生になつてボクに友達が出来たように、あいつにも新しい出会いがあつた。それが三浦だ。

「ホールデンワーカー」が明けたくらいから、三浦が渡瀬にくつつくようになつてきて、とにかくイライラした。

ボクは、どこか油断していたんだろうね。渡瀬を好きなる人がほかに出てくるはずが無いって、けど、魅力の無い人ならボクも好きにならないはずなのに。

三浦の出現がボクの気持ちを加速させたんだ。渡瀬が痺れを切らして、また告白してくるのを待つているつもりが、いつの間にか、渡瀬の気持ちがボクから離れていた。

まったく、笑えない話だよ。一番大事で一番欲しかつたものをいつの間にか無くしてしまつなんて。

それでも、渡瀬は優しい奴で一昨日みたいにボクを気にかけてくれている。

そういう渡瀬の行動が、ボクにまだ氣があるんじゃないかつて言う期待をさせてくる。だけど、渡瀬の普段の行動を見ていたらボクに気がなくなつたのは一目瞭然だ。だけど、ボクが渡瀬を好きだつていう気持ちは、変わらなかつた。むしろ、加速度的に肥大化を繰り返して、もうどうしようもないくらいに膨れ上がつてしまつて。ボクはこの気持ちをどうにかしないと壊れてしまう。ストーカーなんて犯罪じみたことなんてしないけど、それでもこのままじゃ何処にもいけない。せっかく渡瀬がボクに開いてくれた道はたくさん有るのに、ボクが立ち止まついたらなんにもならない。

だから、ボクはこの気持ちの結末がどういうものであれ、受け入れないといけない。

……ああ、そうか、ボクは結末を知るのが怖いんだ。

だから、今もこうして逃げてる。今日はボクにとつてトクベツな日なのだから、勇気を振り絞りつつて昨日決意したはずなのに、逃げちゃつてたんだ。

馬鹿だなボクは……自分の気持ちから逃げた結果が今の状況なのに、学習能力が無いんだ。

ふと、自分の思考から現実に目を向けると一ツコウキスゲがこつちを見ているような気がした。

……そうだね。明日があるもんね。ボクがんばるよ。

そう心で呟いて、次にとるべき自分の行動を決めた。

公園に着てからいつたいどれくらい時間がつたんだろう？この公園には時計というものが存在していないので、確かめる術がない。無いって言つても、公園には無いという意味で、自分のもつている携帯電話の時計を見れば時間を知ることくらいは出来る。

まあ、今ボクはこの時間を楽しんでいるんだから、わざわざ現実に戻るような行為をするつもりは無いんだけどね。

遊んでいた子供たちが、親にお菓子をねだつて公園から出て行ったのがついたつだから、たぶん3時を過ぎた頃なんだろうと思う。ボクが公園に着いたのが2時すぎだから、大体1時間をこの公園で過ごしたことになる。

結構飽きっぽいって言つのを自称しているんだけど、1時間もベンチに腰掛けてボーッとしているなんて、ボク自身が驚きだ。太陽も2時過ぎに比べたら幾分傾いていて、ベンチに被つていた影もその範囲を広くしている。

さて、1時間もここに座つて何をしていたか？
自分自身、大したことをしていない。遊んでいる子供たちを眺めて、軽く癒されたような気がする。

自分の子供なんて生んだことも育てたこともないから、親の気持ちなんてわからないと思つけど、見守るつていう行為が少しわかつたような気がした。

そして、花壇に植えられた花を見ていた。
よく見ると、最近植えられたらしく、土の色も新しい土を足したのか、色がまだ馴染んでいない。

それでも大事に植えられたのがわかるくらい、丁寧に植えられた。

そして、そこから渡瀬を連想して、今の自分の気持ちを整理していたんだつた。

結局のところ、答えなんて初めから決まっていたのかもしない。だけど、その答えが導き出す結果を知るのが怖かったんだ。それに、再確認したことがある。

それは、ボクが渡瀬を好きだつて事。

この恋がどんな結末を迎えるとも、ボクはそれを受け入れる。たとえこの気持ちを受け取つてもうえなくとも、そこからボクは

歩き出せなきやいけないんだから。

「」のまま立ち止まつてちやいけないんだ。

自分自身に気合を入れて、自分の両足に力を入れて立ち上がり、
としたその時、公園の入り口に一人分の影が伸びていた。

「これを偶然と呼ぶんだろうか？」

会いに行こう、そう思っていた相手が、今日の前に居る。
けど、その隣には……三浦が居た。

「あれ？ 葉山さんじやんー奇遇だね？ 何にしたの？」

左右二つの三つ編みを揺らしながら、わざとらしく首をかしげる。
その隣で、田を丸くしている渡瀬が居た。

少し……いや、かなり動搖した表情の渡瀬。それはそうだ。ボク
との約束を蹴つてまで、三浦と会っていたんだから。

ボクと渡瀬に特別な関係なんて無くて、後ろめたくなるのは仕
方ない。

それに、ボクだつてショックを受けてる。

そりや、多少予想は出来ても、実際田の前で見せ付けられたらか
なり胸が苦しくなる。

「ん~？ 渡瀬君と葉山さん、見詰め合ひやつて何してんの？」
かなり、うやうや話しかけてくる三浦。心なしかすこし、イライラ
してゐみたい。

けど、そんなの全く気にならなく、ボクの心は静まつてい
た。

ボクは、前に進みたいだけなんだ。渡瀬がどう思つていても関係
ない。ボクは、ボクの為に伝えたいんだから。

渡瀬は気まずそうに、口を開いた。

「いや、その、なんていうか、『ごめんな

「何で謝んのよ。別に、ボクはとやかく言つてじやないし。」
何に謝つてゐるのかも、わかつてゐる。

けど、ほんとにそんなの今はどうでも良かつた。

そして、ボクが口を開きかけたときに、三浦がかぶせてしゃべっていた。

「そうそう、葉山さんがとやかく言う筋合い無いよね。今、二人の世界に入つてたみたいで、私が邪魔みたいになつてたけど、実際邪魔なのは葉山さんなんだよ？はやく、渡瀬君を解放してくれない？」

「なに言つてんだよ。別に邪魔とかじゃないだろ？そんな言い方はないと思うぞ？」

「邪魔だから、邪魔つて行つてんじゃん。ほら、花壇に花を植えるんでしょ？早くしょ？」

そういうと、三浦は渡瀬の手を引いて花壇まで歩いて行こうとしていた。

渡瀬はこっちを向いて必死だつたけど、強引に連れて行かれていた。

三浦の言つたことは、確かに正しい。今、この状態を見ればどちらが邪魔者かなんて、一目瞭然だ。今のボクはただの邪魔者。確かに邪魔者だ。だけど、邪魔者には邪魔者なりに考え方や気持ちがある。相手の言つてることが正しいからといって、引き下がれない。今のボクは、引き下がつちゃいけないんだ。

それに、この花壇を造つたのが渡瀬だと聞いてやつぱりと思つていた。

こんなにも、暖かくて、優しくて、花たちが生き生きと咲いているんだ。

この花壇を造つたのは、とてもなく優しい人。それが、渡瀬だと分かつて安心した。

この人を好きになつて良かつた。

「確かに、ボクは邪魔だよ。それは分かつてる。わかつてるけど、一つだけ言わせてほしい。」

渡瀬と三浦が同時に振り向く。

文句を言おうとする三浦だけど、この言葉だけは邪魔させない。これは、ボクのけじめ。ボクのスタートの合図。

ボクは、お腹いっぱいに吸い込んだ空気一気に吐き出しつつ、力いっぶいに叫んだ。

「渡瀬が好きだ！――」

やつと言えた。

やつと渡瀬に伝えたいことが言えた。ずっとずっとと言いたくて、けど言えなかつた事。『好き』という言葉。この言葉をもつと素直にいえいたらこんな結末にはならなかつたのかもしれない。けど、こうなつたのも自分が悪いんだから受け入れないといけないよね。どんな返事が来るかなんてわかりきつてゐる。だけど、ボクはそれを受け入れるだけの覚悟をしてるつもりだ。

だけど、次に口を開いたのは、渡瀬では無かつた。

「なんだ。だけど、残念ね。渡瀬君は今、私と付き合つてんの。だから、葉山さんは失恋つてこと！あはははは、いきなり叫んじやつてばつかみたい」

頭から冷水をぶつ掛けられた氣分。高ぶつていた氣持しが、一気に地底深くまで沈んでしまつた。

渡瀬の力ノジョなのだから、それくらい言つ権利がある。だけど、こつこつのは渡瀬の口からちゃんと聞きたかつた。覚悟していきたはずなのに、口コロが苦しくなる。ふと浮かび上がつたイメージは、夢で見たボクが抱えていた花が枯れていくイメージ。……そうか、あの花はボクの恋心だつたんだ。

「そつか、そだよね。あんなに一緒にいたもんね。うん、わかつた。」めんね、デート中に。

泣くな。泣くな！

そう思つても、目からは涙が止まらない。

覚悟していた痛みが、ズタズタにボクの口コロを傷つけていく。もう届かない渡瀬を実感して悲しい気持ちが口コロを支配する。

「三浦！なに言つてんだよ！」

渡瀬、今更焦つても遅いよ。

もう、ヤダ。

もう、こんな顔、渡瀬に見せたくない。こんな泣き顔なんて見せたくないよ……

ボクは、渡瀬の言葉なんて聞かずに家に向かつて走り出していた。

ボクは、失恋した。

けど、これでボクは次に向かつて歩き出せる。

今日は、力いっぱい泣こう。明日から、笑って過ごせるようだ。

そう、明日があるんだから。

……そう思おうと思った。けど、そんなの綺麗事だ。

どれだけ、前向きに考えようとしても、涙が次から次から溢れ出して止まらない。

どれだけ、どれだけ……どれだけ渡瀬を想つっていてもこの気持ち

は届かない。

それが、とてつもなく悲しかった。

家に帰つてすぐに自分の部屋に引きこもつた。

泣き顔なんて親に見せたくなんか無いし。

昼真っから引きこもり、健全な高校2年生のすることじゃないね。けど、ボクは今外に出ることなんて出来ない。

一度決壊したダムは、中の水が全てなくなるまで流出する水を止めることが出来ないのと一緒にこの涙を止めるのも無理だ。

今日はこのままいいや。

とりあえず、こりいろ疲れた。

ボクは、そのままベットに横になつて眠つてしまつていた。

ボクの目を覚ませたのは、携帯電話のバイブレーション。

腫れぼったいまぶたをこすり、誰からの着信かも確認しないまま電話に出た。

「もしもし」

「あ、やつとでた！今レイの家の近くの公園にいるんだけど、渡瀬君がいるんだよ！今がチャンスだよ！ほら、早く来て！三浦が近くにいるけど、それは私が何とかするから」

そつか、まだ真紀に報告してなかつたんだつた。

「まだ居たんだ。せつかくだけごめんね。今日のお昼の3時くらいに告白して玉砕してきたところなんだ……ごめんね」

自分で言つて、また傷ついた。ほんとボクの心は弱りきつてゐたいだ。

「はあ～！？嘘でしょ！？絶対何かの間違いだよ！…ちょっと渡瀬君に聞いてみる。だから、レイも早やく公園まで来て

「ちょっと待つてよ。振られたつて

ブチッと電話が切れた音がした。

ボクの返事も待たないで切るなんて……

これじゃ、『行きたくない』なんて言つてられないじゃない。

振られたところに、また行くなんて、精神的にもきついんだけど。

それに、たぶんまだ三浦も居るし……

それでも、行かないといけないんだろうな……

鉛のように重たくなつた体を無理やりに起こしていく準備を始めた。

ふと、時計を見ると午後5時半、あれから2時間半も眠つてたみたいだ。

渡瀬に告白するために真紀が選んでくれた服も、そのまま寝てしまつたから、しわまみれだ。

こんなの真紀に見せたら怒るんだろうな。渡瀬には見せたし、こんなしわになつてももう良いかな。

どうせ、もう可愛い格好をして、いつかこは振り向いてくれないの確定だし。

「お母さん、ちょっと友達と公園で話してくる」

そうお母さんに声をかけて玄関を出た。

玄関においていた自分の自転車にまたがる。

外は夕方になりつつあるけど、まだまだ日が高い。

小さいときは、まだまだ遊べると思つていたけど、いつなつてしまえば太陽が沈むのはすぐだ。

まあ、暗くなる前には家に帰りたいとか考えていたりする。とりあえず、待たせるのも悪いから急いで公園に向かいますかね。

お昼ごろは歩いて10分くらいかかった公園だけど、自転車で行けば5分とかからない。

夕方の少し涼しくなった風が頬を掠めていくのがすゝく気持ちが良い。

なんだか、お昼にあつた出来事が夢見たいな気分になつてくる。結果がどうであれ、受け入れなければいけない。覚悟はしていたつもりなのに、受け入れたつもりなのに、涙は止まってくれなかつたけど。

それでも、ボクなりにけじめはつけたつもり。

だから、渡瀬に会うのもちょっと怖いけど、でも、逃げ出しても仕方ないし。これからは一つの恋の終わりとして胸にしまつて、友達として渡瀬と付き合つて生きたいし。

まあ、ボクなりに出した結論なんだからしっかりと自分自身で受け入れないとね。

だから、みんなの前では泣かないようにしようと……

そんなこと考えながら自転車を運転していたら、あつという間に公園についてしまった。

そして、公園には似つかわしくない怒声が響き渡つていて、入つていつて声をかけるなんて出来ないくらいすごい剣幕で怒鳴つてゐる真紀がいた。

「どうして、どうして渡瀬君は何にも言わなかつたの?...どうして

君は大事なことを言わないまま居られるのよー?」

「どうしてつて言われても……」

すゞい剣幕で怒る真紀に、申し訳なさそうな顔をしている渡瀬。

一田見れば瞭然だ。真紀は、ボクが告白して渡瀬が断つたことを怒ってるんだ。

でも、仕方ないじゃない……。渡瀬はもうボクのことは好きじゃないんだから。なんとか止めたいんだけど、中に入れる雰囲気でない。しばらく、様子を見ることにした。

「真紀? そんなに怒ること無いじゃない。どうせ、私が言わなくても渡瀬君が言つてたんだから。ね、私たち付き合つてるもんね」
何度も聞いても胸が苦しくなるセリフ。一回田だというのに一回田よりも悲しくなる。

「渡瀬君がそんなだから、レイも三浦も勘違いするんだよ? わかつてる! ?」

「真紀? 私は勘違いなんてしてないよ? だつて、渡瀬君は私が『付き合つてる』って言つても否定しなかったもん」

「だから、そこが渡瀬君の悪いところなの! どうして? どうしてそういうレイに言つてあげなかつたの?」

「だからそれは……」

「三浦が居たから言えなかつた? 向けられていい好意をむげにして三浦を傷つけたくなかったから? ふざけんじゃないわよ! ! あんたのその態度のせい! どれだけレイを傷つけたと思つてんのよ! ? レイ電話越しでもわかるくらい涙声になつてたのよ? あんたにわかる? レイがどれだけ苦しい思いをしてたか! ?」

「……」

とつとう渡瀬が黙つてしまつた。

ボクとしては三浦と渡瀬が付き合つていないことが驚きだ。あんなにずっと一緒にいたのに付き合つてないなんて……

そして何より驚いたのが、真紀が声を上げて怒つたところを始めてみたから。真紀はどんなに怒つても声を荒げるとこりなんて見

たことが無い。

あんなに温厚な子がここまで声を上げて怒鳴つてくれる。ボクは良い友達持つことがうれしくて仕方なかつた

話にひと段落着いたみたいな沈黙があたりを支配していた。ボクの為に怒つてくれた真紀のお陰でボクの心はだいぶと軽くなつていた。

真紀にお礼を言いたい。渡瀬から本当の答えを聞きたい。その一心でボクの足は真紀たちのところへ向かつて歩き出そうとしていた。けど、突然の笑い声でボクの足は立ち止まつっていた。

「あつははは、真紀も馬鹿じやないの？」
「いきなり笑い出してどうしたの三浦？」

三浦の突然の豹変。

三浦本人以外全員が驚いていた。

三浦の笑い方は嘲笑というのが一番しつくり来る笑い方だ。真紀とは全く違う笑い方、人を馬鹿にするような笑い方。ボクはこの笑い方が嫌いだ。

「だつてさ、渡瀬君も馬鹿だし真紀も馬鹿だから」「はあ？なに言い出すのよ。意味わからんんだけど」

「それを言うなら私のほうが意味わからんないよ。どうしてさ、振つた相手と振られた原因を作つた女の手伝いとかしてんの？誰がどう見ても、葉山さんより真紀の方が全然魅力的じやん。渡瀬君もそうだよ、どうして真紀を振つたの？」

「私が振られたのなんて関係ないじやない！渡瀬君は好きでもないこと付き合う気が無かつただけだよ。ね？」

「俺は、好きじやない奴と付き合う気は無いんだ。だから、田原の告白も断つたし、三浦とも付き合つてない」

初耳だつた。真紀が渡瀬に告白してたなんて。かなり動搖した。ボクの動搖をよそに、三浦の話は続いていた。

「ふうん、その割には私との会話とかかなり楽しんでるよう見えた

けどね。話しかければすぐ時間を作ってくれるし、相談があるつて言つて休みの日に誘つてもちゃんと相手をしてくれた。これならすぐ落ちると思つたんだけどな。残念、なかなか渡瀬君は落ちなかつたね。まあ、別に落としたところで私にメリットなんてないんだけど

「なに言つてんの？ あんた渡瀬君が好きだからずっと一緒にいたんじゃないの？」

「なにそれ、ありえないでしょ？ 全然好みじゃないし。 というか、真紀からは感謝はされても怒られる筋合いなんて無いんだからね。真紀の代わりに葉山さんと渡瀬君に仕返ししてあげたんだから」「そんなんの頼んでない！ ！ どうして余計なことするの！ ？ 私は振られて、ちゃんと諦めた。 レイとは友達だから、レイの恋はちゃんと見守りたかった。 別にレイを恨んでなんか無い！」

「私はね。 渡瀬君と真紀が付き合つのが良いと思うのよ。 だけど、どれだけ真紀を勧めても渡瀬君は全くなびかない。 真紀の魅力のわからぬ馬鹿は、私が精神的に叩き落してあげようと思ったのよ。付き合つてあげてひどい降り方とか使用とか考えてね。 まあ、 私にもなびかなかつたけど」

なに言つてんの三浦。

三浦に対して怒りが浮かんできた。 渡瀬にひどいことをするなんて許さない。

渡瀬はずつと「一二三四」して笑つてて、やさしさで周りを幸せにするような奴なんだ。 そんな渡瀬の辛い顔なんて見たくない。 涙なんて流させたくない。

「別にそんなこと言われても、俺は三浦に対して怒りなんて浮かばないよ。 他人がどう思おうと俺は俺の考へで動いてるだけだし」「お優しいことで、逆に私がやられていたら怒りでどうにかなりそうだけね。 私ね、真紀の事が好きなの。 もちろん異性としてではなくて友達として。だから真紀が渡瀬君に振られて泣いてるのを見過ごすことが出来なかつた。 それがどうしても許せなかつた。 渡瀬

君には全然仕返しきななかつたけど。葉山さんには充分出来たからもう私は満足かな。学校で葉山さんとは話をさせない作戦もうまくいつてたみたいだし。」

ボクのことなんかどうでもいい。どうして渡瀬はそんなひどいことを言わっても平気なの？ボクは、君の悪口を言われるだけではらわたが煮えくり返る思いなのに。

さつきまで怒鳴っていた真紀も、突然の三浦の告白に黙つてしまふし。

多分、次渡瀬にヒドいことを言われてしまつたら、ボクは我慢できずに三浦に手を上げてしまふかもしない。

それくらい、頭にきてる。

「おい、それどう意味だ？もしかして、今まで相談とか言って話しかけてたのは全部、葉山への嫌がらせか？」

「今更気がついたの？やつぱり馬鹿ね。そんなの当たり前じゃない。私の大事な友達の真紀を泣かした奴にささやかなる復讐よ。まあ、それも昼間に済んじやつてもう良いかなつて思つてるんだけど。普段無表情のクセに顔を真つ赤にしながら突然「渡瀬が好きだ！」とか叫んじやつてさ、聞いてるこつちが恥ずかしいよ。ほんと馬鹿だよね。それに、私が付き合つてゐつて言つたときの顔なんてやばかつたよね。この世の終わりみたいな顔になつて泣いぢやつてさ、ほんと」

そこから先の三浦の言葉は聞こえなかつた。

パンツ

何ががはじかれるような音がした。

少し遠くてもはつきりとわかる。三浦が渡瀬に叩かれたんだ。

「俺には仕返しでも何でもしてもかまわない。だけど、葉山を馬鹿にするとか、傷つけるようなことは絶対に許さない！」

渡瀬の怒つた声が公園中に響く。

どうして渡瀬が怒るのよ？ボクが晒わされているだけなのに……

そんなことされぢやつたら、ボクは渡瀬のことあきらめ切れないので

じゃない。渡瀬の気持ちが、まだボクのほうを向いてこらつていて、勘違いしてしまった。

三浦にビンタなんて、男の子が女の子に手を上げるなんてしねやだめじやん。そんなの渡瀬らしくないよ。

いろんな言葉が、頭の中で渦巻いてぐるぐると回っていて混乱しているんだけど、一つだけ確かなことがある。

それは、たつた一つだけだけれども、ボクを想う言葉を聞けたつこと。ボクの為の行動、それだけどうれしくて仕方が無い。

「ほんと、渡瀬君は馬鹿だよね。今更私を殴ったところで、葉山さんの心の傷は消えないって言うのに」

そう吐き捨てるように言つと、三浦はボクが入ってきた入り口とは逆方向の出入口に向かつて走つていった。

「ほんと、渡瀬君はレイのことになると不器用になるよね。今の渡瀬君は優しさのかけらも無いよ? 全く、はじめからそういう風にしておけば、誰も傷がつかなかつたのに。とりあえず、三浦のフォローは任せとおいて。君のお姫様がお待ちかねだよ。」

そういうと真紀はこっちをむいてウインクをしてくれた。というよりも、ボクが来てたのに気がついていたんだ……、そつちのほうが驚きだ。

真紀は、そのまま三浦が消えた出入口に走つていってしまった。ものすごく気まずい渡瀬との一人つきり。

今までは、この一人という空間が心地よかつたんだけど、いまはさつきのやり取りを見てしまった後だし、なんか妙な緊張が張り詰めていた。

「その……聞いてたのか?」

渡瀬はボクに向き直り問い合わせる。

「うん。まあ、聞いてたかな?」

少し申し訳なさそうに目を伏せながら渡瀬は口を開いた。
「ごめん。傷つけるつもりなんて無かった。けど、結果的に傷つてしまつてた。ほんとに、ごめん」

「そんなに謝らないでよ。けど、本当に辛かつた。三浦と渡瀬が付き合つてゐるって聞いて本当に辛かつた。けどね、さつきボクの為に怒つてくれたじゃん、だから帳消しにしてあげる」

「謝つても謝り足りないくらいひどいことをした。葉山に許してもらつても俺が俺を許せないよ……。だから、もう葉山とは会わない。ホントは、葉山に会えるのは物凄く辛い。だけど、傷つけてきた相手なんかに葉山も会いたくないだろし……」

気がついたら想いつきり右手を振りかぶつていた。

「ゴンツ

さつきとは全く違うとつても鈍い音が響いた。

田の前で渡瀬は鼻を押さえながら悶絶している。

「どうか、あまりの不意打ちでなんにも準備が出来ていないま殴られたものだから、そのまま後ろに倒れて転げまわつてる。

「なに芋虫！」こしてんの？子供じやないんだからそんな遊びが足したらダメだよ？」

葉山は田に涙を貯めながら抗議をしてくる。

「誰のせいでこうなったんだよ！？」ていうか、平手打ちじやなくてグーパンチかよ！？」

「当たり前よ。馬鹿な子は馬鹿だから叩かれてしつけされないと覚えないでしょ？痛みと一緒に今回のことを見ておきなよ。そしたら、少しばかりは覚くなれるんじゃない？」

「ひど！いまのはかなり酷いぞ！俺なんでそんなに邪険に扱われてんだよ……つて、原因は俺か……それじゃしかたない……な」

さつきまでのテンションはどこかに飛んでいつたみたいで一気にしおげ返る。

ほんと、馬鹿だ。それにボクは、こういう風に、何でもかんでも自分のせいにして、不幸の主人公を氣取る奴が大嫌いだ。

「渡瀬」

いつの間にか立ち上がってい渡瀬を呼ぶ。渡瀬はうつむいている状態から、こっちに向き直る。

素直な奴だ。無防備な相手を殴るのには少しだけ抵抗を覚える。けれど、今はそんな余裕ボク自身に無いのだからこれは仕方ないこと。

「ゴスツ

さつきのよりもさらに鈍い音が公園内に響き渡る。

「……でも、音が引くいためかそれほど広がってないけど。

「うぐう……」

「テンポ遅れて渡瀬の悲鳴が響く。

ボクの右ストレーントが葉山のみぞおちにクリーンヒットしたから。というか、全力でお見舞いしてあげたからだ。

「本当に馬鹿よね。なにいじけてんの？俺のせいだから？俺に会いたくないだろ？？」

「だつてそつだろ、泣くくらいたくことされたのにまた会いたいとか思う奴いないだろ？」

「こるわよ！こ・こ・こ・！ボクの気持ちを勝手に決めるな！－！悪いと思うなら、酷い事したい以上にうれしい事をしてよ…－…ボクに会えないのが渡瀬にとって辛いって？べつに渡瀬が辛からうがかない。けどね、ボクにとって渡瀬に会えないって言うのが一番辛いの！－ものすごく辛いの！－まだボクに酷い事したいの！－？このドウの変態野郎！」

渡瀬はお腹の痛い身を忘れたかのように、猫が驚かされたかのように目をまん丸にしていた。

自分が言つてゐる意味を自分自身実感してきてかなり恥ずかしい。けれど、ここで恥ずかしがつたりしたら全然格好がつかない。

なら、ここは勢いでやり過ごすしかない。

「女の子にここまで言わせてんのに、何か言つことないの？もしないとか言つなら、ヘタレ決定だからね！」

ここで、一呼吸間に挟む。恥ずかしさのあまり、意味不明なことを口走つてしまっていた。

すうへはあへ、まずは深呼吸。良し、ちゃんとボクが言葉にしな

くちゃいけないんだから

「……なんか意味不明なこと言つてた。待たせてたのはボクだつたよね……あのや、渡瀬。ずっと待たせて、ゴメンね。それでさ……昼間の答え聞きたいんだけど……」

渡瀬の瞳にはとても暖かい色が浮かんでいた。ボクを安心させる色。ボクを安心させる空気。そんなものが渡瀬の周りには満ち溢れていた。三浦が現れるまでの空気。とても懐かしい。

ボクの恋心の花を育してくれた、その空間。さつきまでは、枯れかけていたボクの「口口」の花がいつの間にか、元気になつていて、今にも花を咲かせようとしている。

「こうして言われると、答える方つて物凄く恥ずかしいものなんだな。」

そういうと、物凄く照れくさうに笑つていた。

そんな渡瀬の表情一つでボクの「口口」はとても揺れる。なんていふか、……キュンつてなる。

そんな、ボクはお構いなしに渡瀬は話を続ける。

「俺の気持ちは、あの時から全然変わらず、葉山が好きだ。この状況で俺から言つのはおかしいかもしれないけど、付き合つてくれないか？」

ボクがずっと待つてた言葉。けど、ボクが行動を起こさないと言われない言葉。

初めからボクが素直になつていれば、この言葉をもつと早く聞くことが出来たのかもしれない。けど、今はもうそんなことどうでもいいんだ。

ずっと、ずっと欲しかった言葉を言つてくれたんだから。

けど、渡瀬は馬鹿だ。態度ではすぐわかるくらいに示していたつもりなのに。

それでも、ボクはこの馬鹿が好きだ。

それはもう、隠しようも無いとてもとても大切な気持ち。なら、ボクはどうするか。そんなのもう決まつてる。

ボクは、渡瀬の胸に飛び込んでいた。

渡瀬はそんなボクを優しく包み込んでくれた。

「まつてたよ、その言葉」

ボクの心は温かい気持ちでいっぱいだ。

今までずっと育ってきた、ボクの心を暖かくしてくれる大事な花。ボクの中で育っていた小さなつぼみだった恋は大きな花を咲かせていた。

「もう離さないで、寂しくしないで、ボクだけを見て」
今まで感じていた不安感が口からこぼれる。

「俺のお姫様はわがままだな。これからは、そんな不安感じることなんて無いくらい、楽しくしてやるよ。うつとうしーくらい一緒にいてやる、うざつたくなるくらい葉山だけを見てやる。嫌がつたつて離してなんかやるもんか」

渡瀬はやさしくボクの不安を拾い上げて、消してくれる。

ボクの待つていた言葉をくれる。

うれしいって言つ気持ちでボクの心はこいつぱいになつて満たされていく。

悲しい気持ちが涙のダムを決壊させるように、うれしい気持ちが涙のダムの許容量を超えてあふれてくる。

今まで流した涙とは全然違う。暖かい気持ちがあふれた涙。

何でだろう、すこく安心する。

ボクは優しさに包まれたまま、うれしい涙を流していた。

「渡瀬つて、たまに物凄く気障になるよね。けつこうキモイよ。…まあ、そういうところも好きだつたりするけどね」

ボクの一言多い言葉にも嫌な顔一つもしないで、笑つてくれる。

そんな些細なことがすくうれしくて、ぎゅっと抱きしめる。

渡瀬もボクと同じように力を込めて抱きしめてくれる。

今のボクは、この世界の誰よりも幸せかもしない。

ボクは今、渡瀬と一緒に自転車を押しながら歩いていた。
目的地は渡瀬の家。どうして向かっているかというと、渡瀬が来てほしいからとの事。

いきなり加奈子さんに紹介とかされるんじやないだろ？
そんな一抹の不安を抱えながら渡瀬のほうを見る。
さつき三浦にビンタしたときの怖い顔はどうかへ行ってしまって
いる。

いつものへら顔。このいつもの顔がとても安心する。

「まあ、なんていうんだろ。とりあえず、いろいろ」めんな
「え？ なにいきなり謝つてんの？ 何に対しても謝られているのか心当
たりがありすぎてどれかわかんない」

「えっ？ そんなに俺、葉山にあやまることがあるの？！」

「いきなりテンションあげないでよ。なんかうざいよ。」

「なんかすんぐ俺嫌われてない？ さつきまで、顔真っ赤にしなが
ら俺に抱きつきながら泣いてたくせに」

ドスツ

とてもとても鈍い音が薄暗くなつた住宅街に響き渡つた。
そして例の如くお腹を抱えてうずくまる渡瀬。

「まったく、どうして渡瀬はそんなに殴られるのが好きなの？ やつ
ぱり、Mな感じで変態さんなの？」

「……俺は、殴られたくて殴られてるわけじゃない……変態にしない
でくれよ」

最後の一言はもう泣く寸前くらいな感じで鬼気迫るものがあった。
だけれど、ボクに恥ずかしいことを思い出させるほうが悪い。
あれば人生最大の失態だ。あんな少女漫画のような行動をとるな
んて自分でも信じられない。

「べ、べつにあんたの為に殴つたんじゃないんだからね！…」

「いやいや、葉山そんなキャラじゃねえし。というか、絶対自分の

ためだる」

たまには、正直に言つておかないとへんな勘違にされちゃうよね?

「……渡瀬が恥ずかしいこと言つから」

たぶん、今ボクの顔は真っ赤になつてると思つ。

まあ、周りはずいぶんと暗くなつてゐし、見えては無いこと思つけど。

そう思いながら、渡瀬のほうを見る。

するとどうだらう。渡瀬のほうが顔を真っ赤にしていた。

「うん、今の葉山はさつきまでとのギャップで破壊力抜群だ。」

「意味わからんない」

意味は分かつてゐるけど、かなり照れる。

はいはい、渡瀬はそう呟いてボクの隣を歩いていた。

それから、ボクらは渡瀬の家に着くまで無言だった。

だけど、その無言はとても心地が良い空氣で、ただ一緒に居られる、それがすくうれしかつた。

渡瀬の家について、10分くらゐがたつただらうか。

一度店の奥に入り、戻ってきた渡瀬の手の中には一つの花が咲いていた。

それはそれはとてもとても綺麗でかわいい花だつた。

「はい、これ。葉山にプレゼント。今日、葉山の誕生日だろ?」

「あ、ありがとう」

その花を受け取る。

その花は、ボクがずっと欲しくて欲しくてたまらなかつた花の胡蝶蘭。

その美しさに目を奪われたのはいつたいつだつただらう。

だけど、やはりというか、高校生のボクがおいそれと帰るような値段ではなかつた。

一時期アルバイトも考えたものの、両親のアルバイト禁止という

厳令によりあえなく敗退。

お小遣いを少しずつためて買おうと思つていたんだけれど。

欲しいものを好きな人がくれるって、ものすごく幸せなことだと思つ。それに、ボクの口口口はまた、ふわりふわりと舞い上がりてしまった。

それじゃ、今ここで渡瀬に抱きつこてしまいたいと思つてしまつほど。

まあ、実際に抱きつくなんて恥ずかしいこと今は出来ないけれど。

「あのさ、どうしてボクの誕生日知つてたの？」

ボクの質問に渡瀬は頬を搔きながら答えた。

「田原に聞いたんだ。やっぱり、好きな人の誕生日には何か送つてあげたいもんでしょう？」

「けど、胡蝶蘭って結構良い値段するんじゃない？」

そう、胡蝶蘭は高いのだ。それも、高校生がおそれと買えるような値段じゃない。

「そりなんだよ。おかんに値段聞いてびっくりしたよ。そのおかげで、店の手伝いで土日がつぶれて全然葉山と遊びにいけないし、学校じゃ三浦がずっとしゃべりかけてきて葉山のところに行きにいくし」

「もしかして、土曜日、日曜日に遊びにいけなくなつたのって、お店の手伝いしてたから？」

「そりそり、そのとおり。ほんと参つたよ。まあ、おかげでちゃんと葉山にぴったりの花を渡せてよかつたけど」

そうこうと、またニコッと笑つてくる。

ボクは、勝手に想像して勝手に嫉妬して、勝手に渡瀬のことを決め付けていた自分が恥ずかしい。

ほんと、馬鹿だよね。ちょっと聞いたらすぐわかることなのに。

「胡蝶蘭は可愛くて、綺麗だけど、ボクは全然そんなんじゃないよ

そうこれは、本当のこと。ボクの心の中はずつと乱れてすさんで田も当たられない状態だ。

「なに言つてんだよ。葉山はずつとずつと輝いてるよ。胡蝶蘭のよ

うに綺麗だよ。ずっと見てきた俺が言つんだ間違いないよ」

「それでも、ボクの心の中なんて渡瀬にはわかんないでしょ？渡瀬が思つような良い子じゃないんだよ。ボクは……」

「葉山がどう思つても、俺の田には葉山は見た目者だけじゃなくて、心もすんごく綺麗にしか写らないよ。というかな、友達ができははじめもつと綺麗になつたと思つ。心から樂しいつて言つ気持ちが伝わってきてこつちまでうれしくなつてくれるくらいだよ」

ほんとこの男は恥ずかしいことをスラスラと言つて来る。

だけど、ボクだつて女の子だ。こんなこと言われたら、うれしいに決まつてんじゃん。

それも自分が好きな人に言われるなんて、ほんと……夢見たい。「ん？ どした？ いきなりうつむいて？ もしかしてうれしそぎて泣いちゃつた？」

「そんなわけないじゃん！ 渡瀬はデリカシー無いってよく言われるでしょ？ ほんとサイテー！」

顔を上げたボクは頬に暖かいものが伝つてゐるのを感じた。というか、それを隠すためにうつむいてたんだけれども。

すまなさそうに謝りながら笑う渡瀬。

どうしてこの人を好きになつたんだろう？

いや、違うな。

こういう人だからボクは好きになつたんだろう。

こんなにもデリカシーの無いくせに、大事なところはしつかりと分かつて、こんなにも鈍感なくせに大事なところで鋭くて、こんなにも子供みたいな奴なのに大事なときにはオトナになつて、こんなにも馬鹿だから一生懸命にプレゼントを用意してボクを喜ばせようとしてるのに、そのセイでいろいろな勘違いとかさせたりとかしてさ……

「ほんと、渡瀬つて馬鹿だよね」

「いきなりなんだよ、デリカシーの無い物言いしたのは謝るけど、いきなりバカつていわれるようなことはしてないぞ？」

「そういうところが、馬鹿なんだよ」

それきり渡瀬から言葉は来なかつた。

口をつぐんだ渡瀬の顔を見ると、とても穏やかな笑顔をしていた。

「葉山。好きだよ。これからもよろしくな」

「まあ、そこまで言つなら付き合つてあげないこともないよ? ボクだって鬼じゃないからね。ここまで迫られたら答えてあげないと可哀相だしね……」

ボクの言葉に答えないまま、さつきと同じ穏やかな笑顔。

といつよりも、ボクの考へてることが簡抜けでにやけてるつて言つのが正解かな?

どうしてそういうところで鋭いのよ。そういうのが、ちよつとマツツとくる。

けれど、やつぱりこのことはがんばって伝えないことだめだよね。

「ボクは、ボクが相手を好きで、相手もボクのことを好きじゃないと付き合いたくない。……もう、ボクの言いたいことわかるよね?」

「いいや、全然わからん。だから、ちゃんと言つてくれないか?」

渡瀬のニヤニヤが変態の領域にまで侵入している。

というか、変体オーラが増幅中。

「渡瀬、顔面が……終わってるよ」

「え? ! それって、悲惨なくらい不細工つて事? マジで! ? そんなにヤバイ? 」

バカな奴。そんなわけないのに。

ボクにとつては何よりもかつこよく見える顔。

ボクにとって君は何よりも大事なんだよ?

そういうところまでちゃんと言いたい。けれど……言えない。だから。

ボクは、自分の顔をいろいろといじつてる渡瀬の顔に両手を添えて、その唇にそつと自分の唇を重ねた。

口下手なボクからの最大の意思表示。

一番大事な君へ送るボクからの最高のメッセージ。

重ねた唇をゆっくりと離した。

唇を重ねていた時間は一瞬だったか、それとも1分か一時間か、それすらもわからない。というよりも、時間なんて関係ない。

ただ、気持ちを込めて君に伝えるメッセージ。

「これが、ボクの答え。ちゃんと受け取りなさいよ」

ちらつと、渡瀬の顔を見ると、ボクにも負けないくらい顔を真っ赤にして機能停止していた。

10秒くらいたつてから再起動。

「なんか、葉山にスゲー事された気がする。というか、俺のファーストキス奪われちまつた」

口を押さえながらも、うれしそうな顔を全開にしている葉山。

「ボクの初めてを渡瀬が奪つたんだから、ちゃんと責任取つてよね」

そういうと、渡瀬はいきなりひざまついた。

よくテレビで中世の王ーロッパとかの物語の中の王子が、お姫様にするように、ボクの手を取り。

「お任せください。お姫様」

そういうと、ボクの手の甲にキスをした。

じわり、との部分があつたくなる。

「どうか、恥ずかしい。これが、今の感想。

「そういうのちょっときもいよ？」

「……やっぱり？」

「自覚があつたんだ……まあ、渡瀬と居ると退屈しないで済みそう……ううん、違うな。渡瀬と居たら絶対ボクは楽しい日々が過ごせると思つ。だつてさ、今だつてこんなにも世界が輝いて見えるんだよ？明日も絶対樂しいよ」

素直にそう思つた。

素直に思つたことを口にすることができた。

たしかに恥ずかしいことを言つてるかもしれないけれども、ボクが今思つてることはこれなんだから仕方が無い。

「葉山つてちょっと詩人みたいだね。そういうところも好きだよ」
渡瀬が言ってくれる言葉一つ一つがうれしい。

ボクと渡瀬の関係がいつまで続くかわからない。

けれど、今ボクはこの関係がずっとずっと続けば良いなと思う。
こんなにもボクの世界を明るく照らして、見るもの全てを輝かせ
てくれる人なんてほかにいるとは思えない。

渡瀬にとって、ボクもそうであればもっとうれしいな。

「渡瀬。これからもずっとずっとよろしくね」

この関係がこれからもずっとずっと続きますように、という祈り
を込めて。

「おう！ もちろんだよ」
大好きな君に送るメッセージ。
これが、ボクの人生最大の誕生日プレゼント。

これにて、ハハロの花完結です。

ただ、ちょっとだけこの後田談が浮かんだので、また出来上がりたら投稿したいと思います。

ここまでお付き合いいただきありがとうございました。

さて、せつかくのあとがきなのでこま黙つてこむことを赤裸々に無駄にお話したいと思つます。

あとがきなんていらないぜー！って言つ方、いらっしゃると思つます。

戻つていただいても大丈夫です。ここから先は作者の満足なので…

読んでいただいてありがとうございましたー。感想、評価などがあればよろしくおねがいします。作者が喜びまくりますのでーでは次回作でお会いしましょうー。

戻らなかつたといふことは、私田のおしゃべりに付けてくれるところです。ありがとうござりますー。
ではわたくし、始めさせていただきたいと思つます。

まず、このハハロの花のですが、冷血王女の続編とこむことで作成したものです。

初めの構想ではこんなにも長くなる予定ではなかつたのですが、あれよあれよといまに伸びまくつて、これじゃあ短編には厳しいかな？ということで連載といつ形になりました。まあ、不定期でアップになりましたけれども…

自分なりに女の子の「口」を考えながら練りこんだ葉山に結構思い入れがあります。もちろん、渡瀬や、真紀、三浦などにも思いいれはあるんですけどね。

この小説は、一人称だけで構成しているんですけども、一人の視点では人の動きや、周りの状況などの描写が物凄く難しく、うまく読者様に伝わっているのかとても不安であります。っていうよりも、自分の文才の無さにどれだけ嘆いたことか…。

それでも、完結までたどり着けたのは、感想を下さつたり、お気に入りに入ってくれてる人がいたからです。とてもとても感謝しています。

さて、まだまだ伝えたい気持ちはいっぱいあるのですが、あまり長々と書いて読者様に苦痛をしいるのはいけないのでこの辺で。

また次回作、がんばつてつくつたりしますので、機会があれば読んであげてください。

上方でも書いたのですが、感想、評価などあればよろしくお願いします。作者が物凄く喜びまわります。

それでは、ありがとうございました!!

10年後（前書き）

これは、僕の中のイメージで葉山と渡瀬のその後になつております。もし、そんなの見たくない！って人がいましたら、飛ばしていただいても大丈夫です。けど、あの一人のその後が気になる！って方は、そのままお進みください。

セリが泣き喚き自己主張子繰り返す太陽。そのくせ、空には夏の雲が漂い物凄くすがすがしい。

吹きぬける風は、夏の香りがして暑いのだけれど、懐かしい匂いを運んでくる。

今ボクは、店先で花たちのお世話をしていた。

今日、お店はお休み。休みで、お世話を怠るとすぐこじょげてしまふんだ。まったく、人間以上に纖細かもしね。この毎日花のお世話をする生活にも慣れてしまった。かれこれ、5年くらいかな？初めは、わからない事だらけだったのに、気がついたら自分ひとりで大体のことは出来るようになっていた。

それに、ボク自身花のお世話をすることが好きだしね。こつこつ、花たちに囲まれて生活することに幸せすら感じてしまう。

そんなことを考えながらジョウロを使って水を上げていたら、見知った顔が現れた。

「よつす！レイひさしづり！…つわ～、なんかすんごい似合つてるね！そのHプロンーただ、お花に水あげてるだけなのになんだかお花屋さんみたい！」

「久しぶり真紀。あと、お花屋さん『みたい』じゃなくて、お花屋さんなのよ？」

あれから10年の月日が流れた。

あれが何をさすのかといふと、10年前の誕生日かな？そして、

今日はボクの27歳の誕生日。

20台も後半に差し掛かり、すこしお肌のこととかが気になり始めた今日この頃。

10台のときは誕生日が待ち遠しかったのに、今ではすこし疎ましい。

と云ふか、年をとるつて言つのが嫌になつてきましたつて言つたほう

がいいな。

「あは～、なんか失言だつた？」

そういうふうと、昔のようになり舌を出して笑っていた。

「真紀は高校のときから変わらないね。見た目だけは、すっかりキヤリヤウーマンなのに」「

「そりやあもう高校卒業して8年だよ？バリバリ仕事人間さ……つて見た目だけて酷くない？」

そういうふうで笑う真紀は、高校のときと変わらず魅力的な笑顔をする。

真紀は、結婚間近の彼が居るとか。

せつせつと結婚しちゃえれば良いのに、仕事をまだ辞めたくないって言ひついとでプロポーズを先延ばしにしてもらつてゐるらしい。

「ふ～ん。まあいいや。とりあえず上がってよ。つて言つても、なに出すお菓子無いけどね」

「良いよ良いよ。今日はレイの誕生日だからちやんとケーキ買つてきたし」

そういうふうと、手に提げてた袋からケーキを取り出した。

「ケーキかあ……」

「私が買つてきたケーキじや不満つてわけ？つわ～、酷いな～。そんな事言つてると、友達なくすぞ？」

真紀の言つてることは、確かにそんなんだけど。せつかくもつてきてくれたのに、こんな態度をとつちやいけなことくらい分かってるんだけど……

「そういうんじやないんだけどね。今、うちの中で……」

ケーキを作つてる。そつとおつとしたんだけど、家のなかから大きな声が聞こえてきて黙つてしまつた。

なにやら、台所のほうから黒い煙も見える……

「うわあああ、焦げた！！」

「しょーかしなきや～！」

「あーーー水かけちゃだめだつてばーー凜！！！」

家のなかから野太い叫び声と、まだまだ幼い子供の声が聞こえる。

その声を聞いて真紀は苦笑い。

「なんか、相変わらず渡瀬君と仲良さそうだね」

「そうだね。あの口と変わらずって感じかな？っていうか、今ではボクも渡瀬なんだけど」

「こういうのはすこし照れくさい。」

「あはは、そうだったね。もう、こんなところでのわけないでよ」
そういうて、真紀はボクの肩を軽く叩いてくる。こういう真紀とのやり取りも久しぶりだ。とても懐かしい。

「どたばたと、大きな足音と小さな足音が近づいてきた。」

「悪い、レイ。ケーキ食べられなくなつたから、新しいの買つてくれるわ」

台所からボクの旦那のトオルが顔を出した。

その横には、愛しの愛娘の凛がいる。

今ボクのお腹の中には新しい命も宿つてゐる。

「別に良いよ。真紀がケーキを買つて来てくれたから。ほんと、トオルは不器用だよね。結婚してからまだ1回しか手作りケーキ食べれてないよ？」

「悪かつたつてば、次はちゃんと練習しておくからまかせといってくれ」

そういうと、トオルはにかつと笑つた。高校のときから変わらない笑顔。ボクは、この笑顔が大好きだ。

この笑顔を見ると、大概のことは許してしまつ。付き合つた当時からこいつには甘いんだ。それでも、結構楽しみにしていた手作りケーキ。次こそは食べれるようにと釘をさしておく。

「任せろとかはちゃんと成功してからにしてよね」

「相変わらず、ラブラブだね。見てるこつちが恥ずかしいよ」

物凄い笑顔の真紀。そういう風に指摘されるとなんだか照れてし

まつ。

「らぶらぶ」

舌足らずな声で、そういうながら無邪気に笑つ凜。トオルに似て、すく可愛い笑顔だ。親バカだつて言われてもかまわない。この凜の笑顔は最強だ。

10年前の誕生日から渡瀬との関係は変わることなく今まで続いている。

10年前の誕生日から変わらず、渡瀬と過いす日々はいつも輝いていて綺麗に光つてゐる。

ボクは君に出会えて本当に良かつたと思つ。

だから、ボクは1年に1回の誕生日には言つよつとしてるんだ。ボクの素直な気持ちを

「そりやあそだよ。ボクはトオルのことが今でも大好きだもん」誕生日だからって、もらつてばかりじや悪いじやん。だから、

最高の笑顔でボクからトオルへのプレゼント。

「はいはい、ごちそざま。まったく、ビうして今でもバカップルで居られるかなつて、今はバカ夫婦かーまあ、渡瀬君とレイラしくて良いけどね」

そういつて、微笑む真紀。

照れ笑いをするトオル。

意味も分からずにはしゃいてる凜。

こういう風に、みんなで笑いあえる今の暮らしは幸せで満ち溢れている。

これからも、ずっとずっと笑い会える、家庭を築いていきたい。

10年前にボクの口に咲いた花とは、また違う色を見せてくるボクの口の花。

だけど、その花はあの時と変わらず、美しく咲き誇つてゐる。この花はこれから先、ずっと枯れることは無いと思つ。どうしてつて?

それはね。ボクが今、とても幸せだから。これから先も、きっと
ずっと幸せだから。

10年後（後書き）

読んでいただきありがとうございました。後編を書いている途中に浮かんできたイメージを書いたのが、この10年後のエピソードです。蛇足かもしれません。けれども、僕の中ではこれでこの二人のお話はおしまいです。もし、感想・評価があればよろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8698m/>

ココロの花

2010年10月8日12時18分発行